

鹿児島県総合教育センター

平成26年度長期研修研究報告書

研究主題

より体育好きな児童を育てる体育学習の創造
ー体育を苦手とする児童に焦点を当ててー

鹿児島市立草牟田小学校

教諭 五代 孝輔

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	
1	研究のねらい	1
2	研究の仮説	1
3	「より体育好きな児童を育てる」ための構想	1
4	研究の計画	2
III	研究の実際	
1	研究主題に関する基本的な考え方	
(1)	「より体育好きな児童」について	2
(2)	「体育好きな児童」と「体育嫌いな児童」について	2
(3)	「体育を苦手とする児童」と「体育を得意とする児童」について	3
(4)	「体育好き」と「体育嫌い」、「体育得意」と「体育苦手」について	3
(5)	体育への苦手意識を見取る尺度について	3
(6)	運動有能感を見取る尺度について	4
(7)	体育における「分かる」と「できる」、「動きのコツ」について	4
2	体育に関する意識調査の分析と考察	
(1)	意識調査のねらい	5
(2)	体育を苦手とする人の割合（小学生・中学生・高校生・大学生，保護者）	5
(3)	体育を得意又は苦手と思うようになった時期	5
(4)	体育を得意又は苦手と思うようになった理由	6
(5)	体育を苦手にならないために大切なこと	7
(6)	苦手な児童が「できる」喜びを感じるために大切なこと	7
(7)	教師の体育授業における工夫や手立て	7
(8)	保護者の体育の授業に対する思い	8
3	体育を苦手とする児童への指導方針	
(1)	体育を苦手とする児童に焦点を当てた授業モデル	8
(2)	「苦手意識を踏まえた指導の方向性」について	9
(3)	体育を苦手とする児童生徒に焦点を当てた小中高 12 年間の指導計画	9
4	検証授業とその考察	
(1)	検証授業Ⅰの実際（平成 26 年 7 月実施）	10
(2)	検証授業Ⅱの実際（平成 26 年 11 月実施）	16
IV	研究のまとめ	
1	研究の成果	28
2	今後の課題	28

※ 引用・参考文献

I 研究主題設定の理由

文部科学省は、「平成25年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果・特徴」において、授業改善の視点として、「体育の授業では、運動やスポーツに苦手意識を持っている児童や、女子に焦点を当て、有能感を高める、または、低下させない指導を一層推進していくことが必要である」と示した。また、中村(1989)*1)は、「なによりも、学級の中の『うまくない子』や『できない子』の技術を向上させる指導の系統性とその指導法を明らかにすること」が大切であるとし、そのことによって、「学習は意欲的になるし、子どもたちみんなが互いに信頼し合い、喜びや楽しみを共感、共有し合える学級になり、その技術も向上していくものである」と述べている。

前年度担任した学級において、体育を苦手とする児童の自己評価の中に、「練習してもできない」、「どうすればできるようになるのかが分からない」などの記述が見られた。この原因として、体育を苦手とする児童に焦点を当てた指導をしてこなかったことがある。そのため、体育を苦手とする児童は技能の向上を実感することがあまりできず、体育学習を通して、何を学んだのかが不明確なままであった。さらに、教師は授業づくりにおいて、ねらいや学習内容がやや曖昧で、学習形態にも工夫が足りなかったため、児童の動きから課題を焦点化できず、適切な働き掛けができなかった。同時に、児童も自分や他の児童の課題に気付くことができず、特に、体育を苦手とする児童にとっては、意欲の低下や苦手意識の高まりにつながる状況があった。

そこで、本研究では、小学生・中学生・高校生・大学生、保護者、教師を対象とした体育に関する意識調査や文献等から、体育を苦手とする児童への手立てなどを明らかにした授業モデルを構築する。また、意識調査等を基にした小中高12年間の器械運動領域における系統的な指導計画を作成する。

こうした研究を進めることで、全ての児童の苦手意識が低下し、運動有能感が高まり、「より体育好き」な児童が育つであろうと考え、本主題を設定した。

II 研究の構想

1 研究のねらい

- (1) 小学生・中学生・高校生・大学生、保護者、教師を対象として、体育に関する意識調査を実施し、体育を苦手と思うようになった原因やきっかけなどを分析する。
- (2) 意識調査及び文献研究から明らかになった原因やきっかけを基に、体育を苦手とする児童への学習指導上の手立てや留意点、配慮すべきことなどを明らかにする。
- (3) (1)、(2)を基にした授業モデルを構築する。
- (4) (1)、(2)を基にした「小中高12年間を見通した器械運動領域の系統的な指導計画」を作成する。

2 研究の仮説

体育を苦手と思うようになった原因やきっかけを明らかにして、それを生かした授業モデルを構築し、系統的な指導計画を作成するとともに、体育を苦手とする児童が運動の楽しさや喜びを実感できる学習指導の工夫をすれば、より体育好きな児童が育つのではないかと考える。

3 「より体育好きな児童を育てる」ための構想

体育を苦手とする児童も得意とする児童も、今の状態より少しでも体育好きになってほしいと考える。体育を苦手とする児童は、得意とする児童や中間層の児童の動きを観察したり、アドバ

*1) 中村敏雄 著『教師のための体育教材論』 1989年 創文企画

イス等をもったりする中で、技術のポイントや動きのコツが分かったり技術を獲得したりする喜びを味わわせる。また、体育を得意とする児童は、苦手とする児童や中間層の児童の動きから、どこが課題かを分析し、よりよい動きへと導くための練習方法を考えたり、動き方のコツを教えたりする中で、認識を深め、友達のできるようになった姿に喜びを感じる。このような活動を繰り返すことで、児童の苦手意識は低下し、運動有能感は高まり、より体育好きな児童になっていくと考える（図1）。

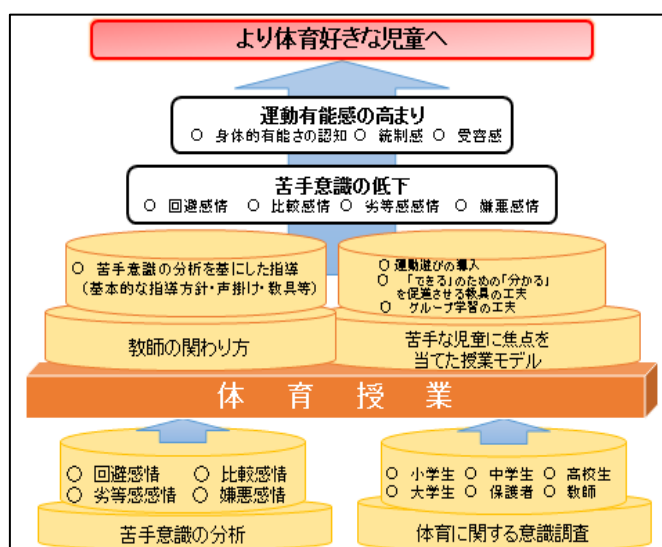


図1 より体育好きな児童を育てる構想

4 研究の計画

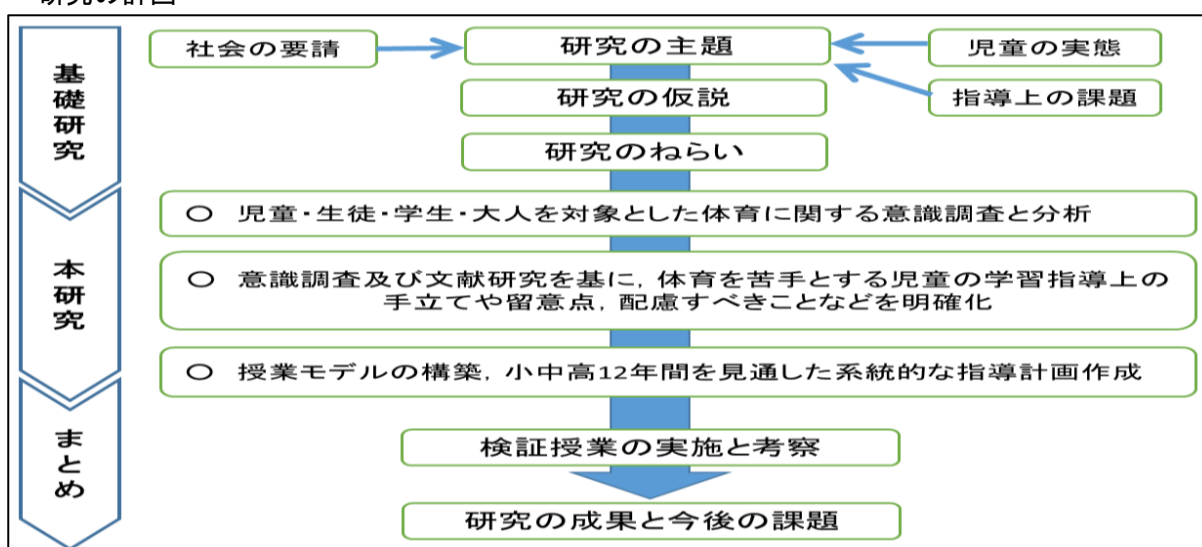


図2 研究の構想図

Ⅲ 研究の実際

1 研究主題に関する基本的な考え方

(1) 「より体育好きな児童」について

「体育好きな児童」とは、体育学習場面における特定のことがらによって、好意的あるいは積極的態度を形成し、受容的な心理状態の児童とする。また、「より体育好きな児童」とは、体育好きを志向した個人内評価が、学習前よりも少しでも高まった児童とする。

(2) 「体育好きな児童」と「体育嫌いな児童」について

「体育好きな児童」とは、体育授業に対して好意的あるいは積極的態度を形成し、受容的な心理状態の児童であるのに対して、吉川ら^{*2)}は、「体育嫌い」を「運動やスポーツを手段として、計画的・組織的に体育教師または担任（小学校の場合）が行う体育授業に対して、体育学習場面における特定のことがら（原因）により非好意的あるいは消極的態度を形成し、学習者

*2) 吉川麻衣他 『「運動嫌い」「体育嫌い」の実態と発生要因に関する研究』 2012年 仙台大学 大学院スポーツ科学研究科修士論文集

が拒否的な心理状態になること」としている。そこで、「体育嫌いな児童」とは、体育授業に対して非好意的あるいは消極的態度を形成し、拒否的な心理状態の児童とする。

(3) 「体育を苦手とする児童」と「体育を得意とする児童」について

「体育を苦手とする児童」とは、運動やスポーツを手段として行う体育学習において、それぞれの運動やスポーツに自信がなかったり、上手にできなかったりする児童とする。また、「体育を得意とする児童」とは、運動やスポーツに自信があったり、上手にできたりする児童とする。

(4) 「体育好き」と「体育嫌い」、「体育得意」と「体育苦手」について

小学生・中学生・高校生・大学生、保護者を対象として、体育の「好き・嫌い」、「得意・苦手」について、調査した。その結果、体育を得意と考える人（1,631人）の約96%（1,563人）が体育を好きと回答した（表1）。このことから、体育を得意と感じると体育を好きになる可能性が高いことが分かる。

そこで、本研究では、対象者2,724人の約19%（513人）の体育を苦手とすると回答した者のうち、本校児童29人に焦点を当て、苦手意識を低下させ、得意と感じ、運動有能感を高める体育学習を展開する。

(5) 体育への苦手意識を見取る尺度について

児童の体育への苦手意識はどのような感情から生まれているのかを調査するために、本研究においては、上家ら^{*3)}によって作成された「体育授業への苦手意識測定尺度」（図3）を活用した。上家らは、運動有能感の高い児童、低い児童の体育授業への苦手意識を比較し、体育授業への苦手意識改善方法の検討を目的に調査を行った。この尺度は、体育に取り組むことをできるだけ避けたいと感じる「回避感情」、体育に取り組む際に他者の様子が気になったり比較したくなったりする「比較感情」、体育に取り組む際に劣等感を感じる「劣等感情」、体育に取り組むに当たり嫌悪感を感じる「嫌悪感情」の下位尺度から構成されている（表2）。下位尺度とは、一般的には、「ある概念が他の概念に包括される関係にある尺度」のことを示す。ここでは、ある概念とは下位尺度、他の概念とは苦手意識のことである。各下位尺度において、3～4の質問項目が用意されており、「あてはまる：5点」、「ややあてはまる：4点」、「どちらもあてはまらない：3点」、「あまりあてはまらない：2点」、「あてはまらない：1点」として得点化した。「回避感情」は20点満点、「比較感情」は15点満点、劣等感情は20点満点、嫌悪感情は

表1 体育好き・嫌いと得意、苦手の関係（対象者2,724人）

	好き	中間層	嫌い	合計(人)
得意	1,563	65	3	1,631
中間層	403	169	8	580
苦手	122	210	181	513
合計(人)	2,088	444	192	2,724

体育授業への苦手意識測定尺度					
※ あなたは体育の授業に取り組むときに、どんな気持ちになりますか。それぞれの質問の中でもっともあてはまる番号に1つ○をつけてください。					
1 あてはまらない	2 あまりあてはまらない	3 どちらもあてはまらない	4 ややあてはまる	5 あてはまる	
1 自分がいやになる	1	2	3	4	5
2 友だちの様子が気になる	1	2	3	4	5
3 いやな気持ちになる	1	2	3	4	5
4 やる気が出なくなる	1	2	3	4	5
5 しっばいがこわくなる	1	2	3	4	5
6 とちゅうであきらめたくなる	1	2	3	4	5
7 そこから逃げたくなる	1	2	3	4	5
8 しっばいを思い出す	1	2	3	4	5
9 はずかしくなる	1	2	3	4	5
10 くやしくなる	1	2	3	4	5
11 がんばってもムダだと思う	1	2	3	4	5
12 できればやりたくないと思う	1	2	3	4	5
13 友だちとくらべたくなる	1	2	3	4	5
14 上手な友だちが気になる	1	2	3	4	5

図3 体育授業への苦手意識測定尺度

表2 苦手意識の下位尺度と質問項目

苦手意識について	
〔下位尺度〕	〔質問項目〕
【回避感情】 体育に取り組むことをできるだけ避けたいと感じる。	6. 途中であきらめたくなる。 7. そこから逃げたくなる。 11. 頑張っても無駄だと思う。 12. できればやりたくないと思う。
【比較感情】 体育に取り組む際に他者の様子が気になったり比較したくなる。	2. 友達の様子が気になる。 13. 友達と比べたくなる。 14. 上手な子が気になる。
【劣等感情】 体育に取り組む際に劣等感を感じる。	5. 失敗が怖くなる。 8. 失敗を思い出す。 9. 恥ずかしくなる。 10. 悔しくなる。
【嫌悪感情】 体育に取り組むにあたり、嫌悪感を感じる。	1. 自分が嫌になる。 3. 嫌な気持ちになる。 4. やる気が出なくなる。

*3) 上家卓他 『小学生における体育授業への苦手意識に関する研究』 2014年 北海道教育大学紀要

15 点満点である。合計 70 点満点で、「体育授業への苦手意識」を評価した。高得点の方が苦手意識が高い。ただし、検証授業Ⅱにおける実態調査においては、「回避感情」、「比較感情」、「劣等感感情」、「嫌悪感情」のそれぞれの合計が異なるため、得点だけでの比較は難しいと考え、百分率で表して、各下位尺度の比較を行った。

この質問紙を用いることで、体育を苦手とする児童について、どの下位尺度が大きく関わっているかを把握し、指導に生かすとともに、変容を見取ることができると考えた。

(6) 運動有能感を見取る尺度について

児童の運動有能感を調査するために、本研究においては、岡澤ら^{*4)}によって作成された「運動有能感測定尺度」を活用した(図4)。岡澤らは、体育授業における運動有能感の構造を明らかにし、小学校高学年から大学生まで活用可能な「運動有能感測定尺度」の作成を目的に調査を行った。その後、この「運動有能感測定尺度」は、小学校3・4年生にも活用可能であることが明らかにされてきた。運動有能感とは、運動技能に対する自信を指す「身体的有能さの認知」、努力すればできるという自信を指す「統制感」、指導者や仲間から受け入れられているという自信を指す「受容感」から構成されている(表3・図5)。各下位尺度において、4項目の質問を行い5段階評価で得点化していくものである。「身体的有能さの認知」、「統制感」、「受容感」がそれぞれ20点の合計60点満点で運動有能感を表すこととし、高得点の方が運動有能感が高いと捉える。これまでに、運動有能感は、子供たちの運動への関心・意欲や愛好度と深く関係していることが明らかになってきている。また、運動有能感を高めることが、自発的動機付けや運動意欲を高めることにつながっていることも明らかになっている。そこで、本研究においては、運動有能感が高まることで、「より体育好き」になると考える。

なお、「苦手意識」と「運動有能感」については、検証授業Ⅱで児童の変容を捉える際に活用した。

(7) 体育における「分かる」と「できる」、「動きのコツ」について

学校体育授業辞典^{*5)}によると、「体育における『わかる』とは運動文化や技術に対する理解・認識のことである…。体育における『できる』とはスポーツなどの運動技術の習熟(技能的習

運動有能感測定尺度					
※ この調査用紙は、運動についての文章が書かれています。それぞれの質問について自分に当てはまると思う番号を○でかこんでください					
1 あてはまらない	2 あまりあてはまらない	3 どちらかあてはまらない	4 ややあてはまる	5 あてはまる	
1 運動能力がすぐれていると思います。	1	2	3	4	5
2 たいていの運動は上手にできます。	1	2	3	4	5
3 練習すれば、必ず技術や記録はのびると思います。	1	2	3	4	5
4 努力さえすれば、たいていの運動は上手にできると思います。	1	2	3	4	5
5 運動をしているとき、先生がはげましたりおうえんしてくれます。	1	2	3	4	5
6 運動をしているとき、友達がはげましたりおうえんしてくれます。	1	2	3	4	5
7 いっしょに運動しようと思ってくれる友達がいいます。	1	2	3	4	5
8 運動の上手な見本として、よく選ばれます。	1	2	3	4	5
9 いっしょに運動する友達がいいます。	1	2	3	4	5
10 運動について、自信をもっている方です。	1	2	3	4	5
11 少し難しいかたでも、努力すればできると思っています。	1	2	3	4	5
12 できない運動でも、あきらめずに練習すればできるようになると思っています。	1	2	3	4	5

図4 運動有能感測定尺度

表3 運動有能感と質問項目

運動有能感について	
【 下位尺度 】	【 質問項目 】
【 身体的有能さの認知 】 運動技能に対する自信	1. 運動能力がすぐれていると思います。 2. たいていの運動は上手にできます。 3. 練習すれば、必ず技術や記録はのびると思います。 4. 努力さえすれば、たいていの運動は上手にできると思います。 10. 運動の上手な見本として、よく選ばれます。 10. 運動についての自信をもっている方です。
【 統制感 】 努力すればできるという自信	5. 運動をしているとき、先生がはげましたりおうえんしてくれます。 6. 運動をしているとき、友達がはげましたりおうえんしてくれます。 7. いっしょに運動しようと思ってくれる友達がいいます。 11. 運動についての自信をもっている方です。 12. できない運動でも、あきらめずに練習すればできるようになると思っています。
【 受容感 】 指導者や仲間から受け入れられているという自信	5. 運動をしているとき、先生がはげましたりおうえんしてくれます。 6. 運動をしているとき、友達がはげましたりおうえんしてくれます。 7. いっしょに運動しようと思ってくれる友達がいいます。 9. いっしょに運動する友達がいいます。

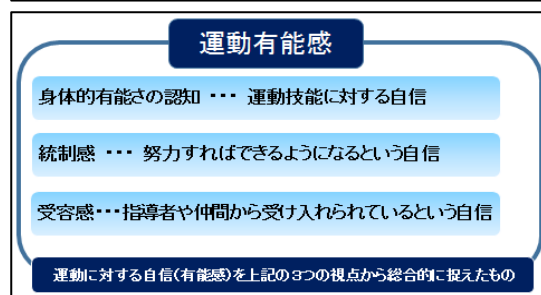


図5 運動有能感について

*4) 岡澤祥訓他『運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究』1996年 スポーツ教育学研究

*5) 宇土正彦他『「わかる」と「できる」 学校体育授業辞典』1995年 大修館書店

熟)をいう。…『わかる』は『できる』の土台であり、『わかる』は次の『できる』の飛躍をもたらす。」と記されている。そこで、「分かる」と「できる」、「動きのコツ」の捉え方を以下のとおりとした。

ア 「分かる」について

「分かる」の定義を次のように捉えた。

運動技術のポイントや動きのコツが分かること（認識）

イ 「できる」について

「できる」の定義を次のように捉えた。

その動きが身に付いたり、よりうまくなったりすることであり、技術を獲得し技能が向上すること（技能習熟）

ウ 「動きのコツ」とは

「動きのコツ」の定義を次のように捉えた。

「できる（よりうまくできる）」ためのその人なりの動き方の感覚のこと

※ この感覚は、運動の習熟度やこれまでの運動経験の差などにより個人差が見られる。

2 体育に関する意識調査の分析と考察

調査期間	調査方法	対象者
平成26年 6月下旬	質問紙法	小学校3校1,263人、中学校3校492人、高等学校2校445人、 大学1大学196人、保護者328人、教師65人 合計2,789人

(1) 意識調査のねらい

小学生・中学生・高校生・大学生、保護者、教師を対象に、「いつ、どのような原因やきっかけで体育を苦手と思うようになったか」など体育に関する意識調査を実施し分析する。

(2) 体育を苦手とする人の割合（小学生・中学生・高校生・大学生、保護者）

体育を苦手とする人の割合は、全体的に男子より女子が高いことが分かる。特に中学3年生女子の割合が最も高くなった。小学校段階の女子をみると、学年が上がるにつれて体育を苦手と思う児童の割合が高くなっている傾向があることが分かる(図6)。また、男女合計でみると、ともに中学1年生の割合が高い。このことから、異なる小学校から集まった人間関係への対応、学習の進み具合や難易度の違い、担任制から教科担任制などへの戸惑いなどの要因が反映されていると予想される。

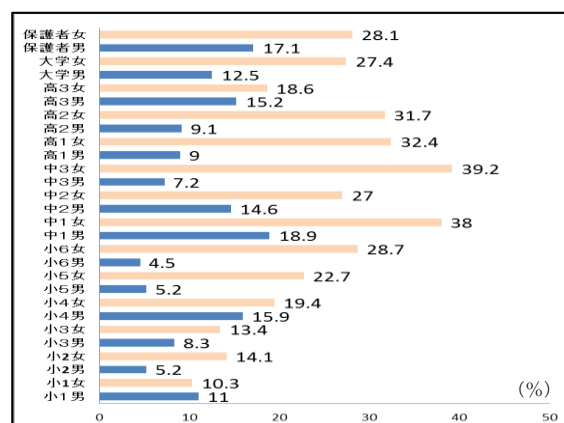


図6 「体育を苦手とする人」の割合

(3) 体育を得意又は苦手と思うようになった時期

体育を「得意である」又は「得意であった」と回答した小学生・中学生・高校生・大学生、保護者は、1,629人であり全体の約6割であった。このうち小学生を除く中学生・高校生・大学生、保護者707人の得意と思うようになった時期は、小学1・2年生が最も多く、次いで小学校入学前が多かった(図7)。そして、小学3・4年生から下降傾向にある。また、体育を「苦手である」又は「苦手であった」と回答した小

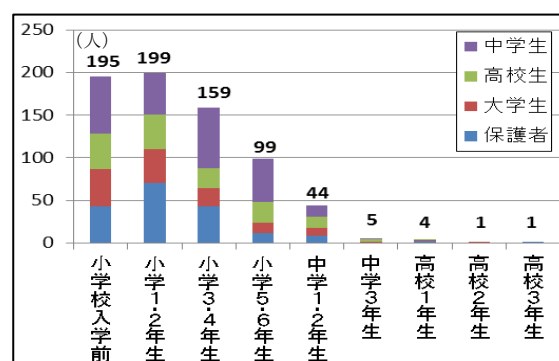


図7 体育を得意と思うようになった時期（中・高・大学生と保護者）

学生・中学生・高校生・大学生，保護者は、513 人であり、全体の約 2 割であった。このうち小学生を除く中学生・高校生・大学生，保護者 359 人の苦手と思うようになった時期は、小学 3・4 年生が最も多い（図 8）。得意と思うようになった時期のピークが小学 1・2 年生であったことと照らしてみると、体育を得意又は苦手と思うようになった時期においては、小学 3・4 年生の授業を重要視する必要があると考えられる。体育の学習内容においては、小学 1・2 年生では、「器械・器具を使つての運動遊び」、「走・跳の運動遊び」など運動遊び中心であるのに対して、小学 3・4 年生からは、「器械運動」、「走・跳の運動」など運動中心になるため、美しさや出来映え、タイムなど、その運動の特性を競ったり楽しんだりすることが増えてくる。そのため、この時期の児童は、体育学習の中で「できる」、「できない」が自覚されたり、友達との比較から苦手と感じたりすることが多くなる。したがって、小学 1・2 年生では、様々な運動遊びを通して運動の楽しさに十分触れさせることが大切と言える。また、小学 3・4 年生では、小学 1・2 年生の運動遊びで味わった楽しさや喜び、動きを生かして、「分かる」、「できる」楽しさや喜びを、ゆるやかに味わえる授業を展開していくことが望ましいと言える。

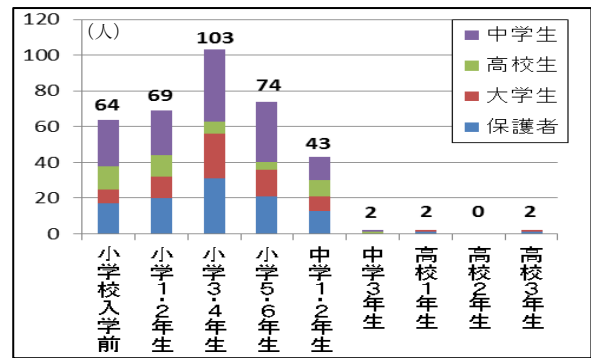


図 8 体育を苦手と思うようになった時期（中・高・大学生と保護者）

- (4) 体育を得意又は苦手と思うようになった理由
体育を「得意である」又は「得意であった」と回答した小学生・中学生・高校生・大学生，保護者 1,629 人にその理由を尋ねたところ、図 9 のとおりであった。

また、体育を「苦手である」又は「苦手であった」と回答した小学生・中学生・高校生・大学生，保護者 513 人にその理由を尋ねたところ、図 10 のとおりであった。

体育を苦手と思うようになった理由で、最も多かったのが、「うまくできない」であった。また、得意と思うようになった理由で 2 番目に多いのが、「上手にできる」であった。この結果から、体育において「できる」、「できない」が、その後の得意意識、苦手意識に結び付くことが分かる。したがって、「できる」を全ての児童に保証する体育授業を目指すことで、体育に対する苦手意識は減ると考える。また、「できる」ようになるためには、「技術のポイントや動きのコツなどを分かる」ことが重要と考える。体育を得意と思うようになった 3 番目の理由が、「どうすればできるかが分かる」であり、また、体育を苦手と思うようになった 3 番目の理由が、「どうすればできるかが分からない」であることから、これらのことから、「分かる」を大切にした体育の授業を改善していく必要があると考える。

体育を苦手と思うようになった理由で 2 番目に多かったのが、「体を動かすことが好きでない」

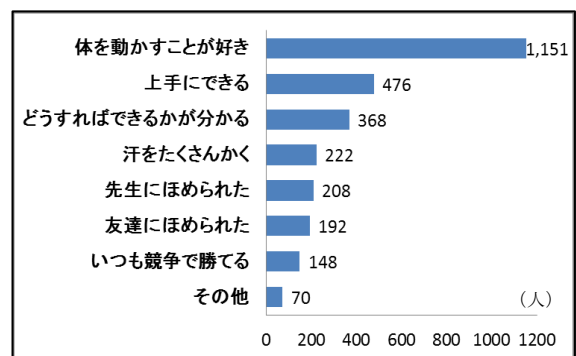


図 9 体育を得意と思うようになった理由

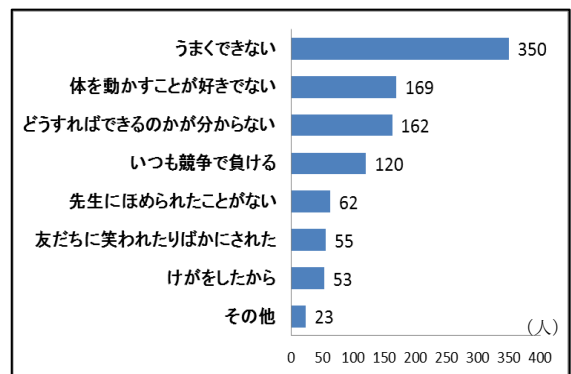


図 10 体育を苦手と思うようになった理由

であった。また、得意と思うようになった理由で最も多かったのが、「体を動かすことが好き」であった。この結果から、「体を動かすことが好き」と児童が感じれば、体育を得意と思うようになるのではないかと考えられる。そのために、体を動かすことの楽しさや爽快感などを友達とともに味わわせたいと考える。具体的には、低学年の時期に様々な運動遊びの楽しさを十分味わわせることや中学年・高学年の時期に体育授業の導入で、主運動につながる運動遊びを楽しみながら行わせることなどが挙げられる。

(5) 体育を苦手にならないために大切なこと

体育を苦手とする人へ、「体育を苦手にならないために大切なこと」について尋ねたところ、最も多かったのが「コツが分かる」であった(図11)。次に多いのが、「できるようになること」であった。このことから、体育を苦手とする人は、「できる」ようになるための「分かる」ことを体育授業に求めていると言える。また、友達との協力が大切という回答も多かったことから、「コツが分かる」ことを授業の中心に据えながら、児童相互の学び合いを重視することが大切だと考える。

(6) 苦手な児童が「できる」喜びを感じるために大切なこと

苦手な児童が「できる」喜びを味わうために大切なことについて、「体育を苦手とする人」、「体育を得意とする人」に対してそれぞれ調査した。体育を苦手とする人は、一番に「コツが分かる」ことを大切だとし、次に「友達同士の励まし合いや教え合い」が大切と考えている(図12)。しかし、体育を得意とする人は一番に、「友達同士の励まし合いや教え合い」が大切とし、次に「コツが分かる」ことが大切であると考えている(図13)。このことから、体育を苦手とする児童に「できる」喜びを感じさせるためには、運動技術のポイントや動きのコツを中心にした児童相互の励まし合いや教え合いを取り入れた授業をすることが重要と言える。そして、体育を苦手とする児童の「できた」、「分かった」をグループや学級全体で共有し、成長をともに喜び合うような授業を展開したい。そのためには、異質集団におけるグループ学習という学習形態が望ましいと考える。この異質集団については、技能差が異なる者同士が同じグループになるようにし、人間関係等も考慮して構成した。

(7) 教師の体育授業における工夫や手立て

教師の授業を行う上での工夫や手立てでは、「場の設定の工夫」、「グループやペア学習による教

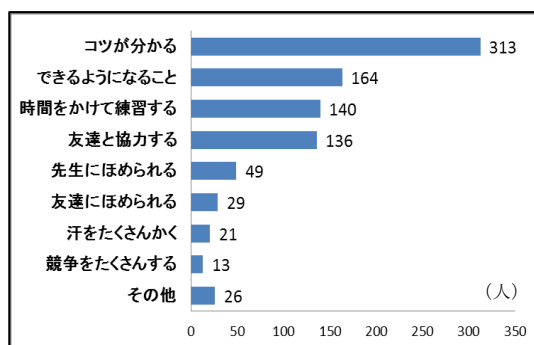


図11 体育を苦手にならないために大切なこと (体育を苦手とする人)

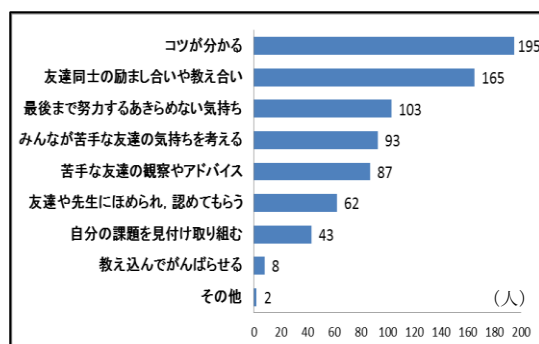


図12 苦手な児童が「できる」喜びを感じるために大切なこと (苦手とする人)

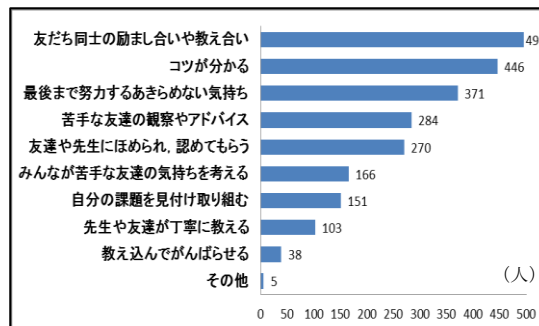


図13 苦手な児童が「できる」喜びを感じるために大切なこと (得意とする人)

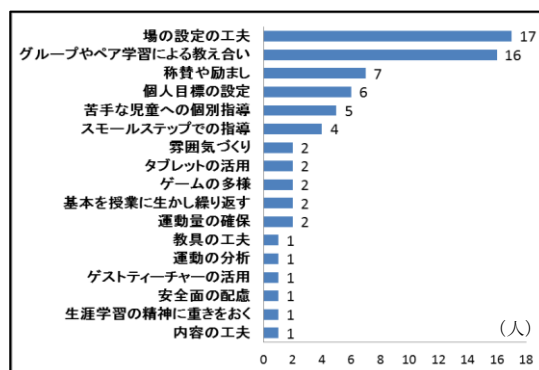


図14 教師の授業を行う上での工夫や手立て

え合い」が最も多かった（図 14）。このことから、教師は場の種類や数、授業形態を大切にしていることが分かる。一方で、「運動の分析」や「内容の工夫」といった授業の内容面の充実に関わる回答は少なかった。

(8) 保護者の体育の授業に対する思い

図 15 から保護者が、「コツが分かること」を重要視していることが分かる。将来、必要となる体育の力は、「できる」ことよりも「分かる」ことであると捉えることができる。また、「友達との協力」や「先生にほめられること」も重要と考えており、児童同士や教師との温かい人間関係を基に体育の授業が展開されることを期待していると言える。

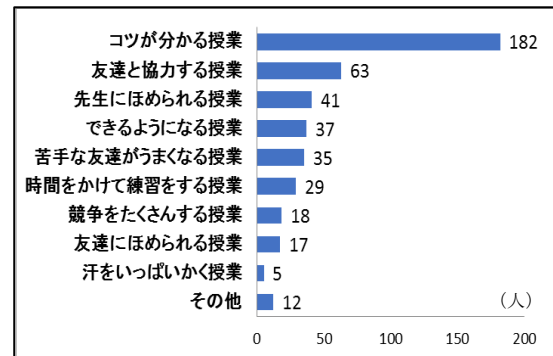


図 15 保護者の体育の授業に対する思い

3 体育を苦手とする児童への指導方針

(1) 体育を苦手とする児童に焦点を当てた授業モデル

意識調査結果や理論研究を基に、学習指導改善の重点を以下のとおりとした。

【学習指導改善の重点】

- 重点 1：主運動につながる運動遊びの導入
- 重点 2：『できる』ための『分かる』を促進させるための教具の工夫
- 重点 3：グループ学習の工夫

上記の学習指導改善の重点を生かして、体育を苦手とする児童に焦点を当てた授業モデルを構築した（図 16）。導入段階における重点 1 では、はじめに、BGM を使い楽しい雰囲気の中で準備運動を行う。そして、主運動で使う部位のストレッチをしたり体をほぐしたりする。さらに、児童の活動欲求が高まるように、サーキット型の準備運動等を行う。その際、主運動につながる類似の運動を多く取り入れることで児童の感覚づくりに役立てる。次に、理想的な動きを示した写真や映像と今までの自分たちの動きの写真や映像から、違いを見付け、「できる」ようになるために必要な技術のポイントなどを考えさせ、共通課題の設定を行う。その際、でき

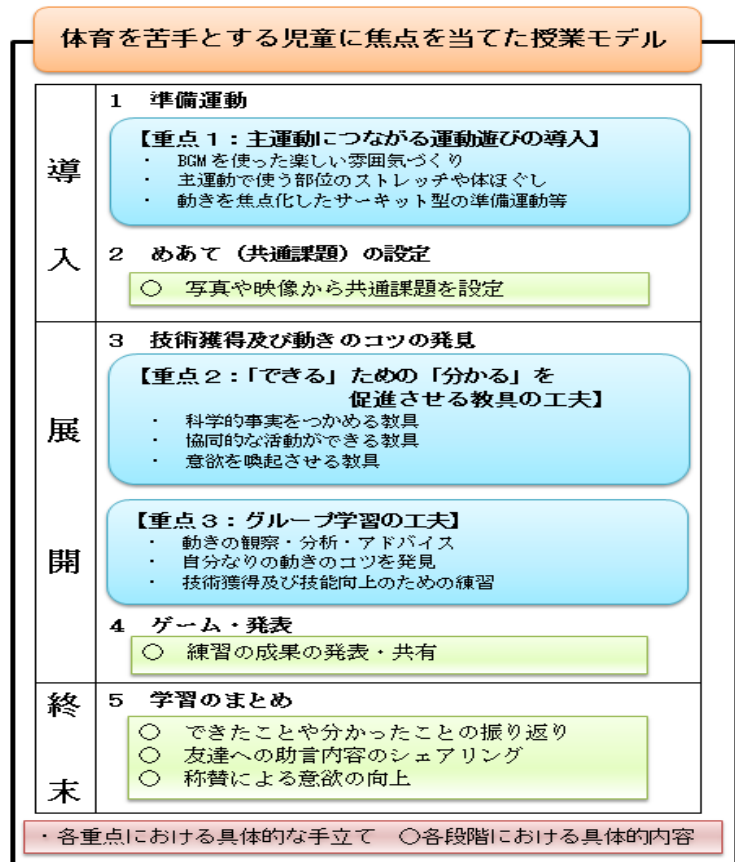


図 16 より体育好きな児童を育てる授業モデル

るだけ児童の思いや考えを引き出しながら焦点化した共通課題の設定を行う。展開段階は、技術獲得及び動きのコツの発見の場とし、重点 2 では、協同的な活動によって、科学的事実をつか

ませたり、意欲を喚起させたりする教具を使うようにする。また、**重点3**では、「できる」ためにはどうすればよいかを考え、互いに動きを観察し、自分の考えを伝えたり友達の考えを聞いたりする活動を通して、技術のポイントや動きのコツを見付けていく。また、「できる」ようになった児童は、まだできていない児童に教えていく。そして、みんなが技術のポイントや動きのコツを「分かり」、「できる」ようになる学習を目指す。さらに、グループ内発表を行うことで、相互の練習の成果を発表し、友達の思いを共有する。終末段階では、「できたことや分かったことの振り返り」を行う。その際、友達からの助言の内容についても発表させて、グループや学級全体でのシェアリングをするようにする。また、「称賛による意欲の向上」を意識した学習のまとめを日常的に行うことで、情意面の更なる向上へと結び付けたい。

(2) 「苦手意識を踏まえた指導の方向性」について

「体育への苦手意識測定尺度」を使った調査から児童の苦手意識の下位尺度を明らかにし、具体的に指導に生かせるように、「苦手意識に基づく指導の要件」を作成した（表4）。「回避感情」、「比較感情」、「劣等感情」、「嫌悪感情」それぞれに対して、「授業で見られがちな言動」、「基本的な指導方針」、「教師の働き掛け」、「教師の言葉掛け」、「教具・場の設定」について明記し、授業づくりや児童への具体的な指導に役立てた。

表4 苦手意識を踏まえた指導の方向性

下位尺度	授業で見られがちな言動	基本的な指導方針	教師の働き掛け	教師の言葉掛け	教具・場の設定
回避感情 体育に取り組むことをできるだけ避けたいと感じている。	- 自分の順番を後回しにする。 - 友達に順番を進める。「やりたくないな。先にやっていいよ。」	機会を平等に与え、成功体験を感じさせ、やればできると感じられるようにする。	- 温かなグループ学習の中で、試技など機会を平等に与える。 - 自らの行いたくなるように温かい言葉掛けをする。	「だんだん上手になってきたね。もう一度見せて欲しいなあ。」 「がんばったら、できるようになったね。」	児童自らが取り組みたくなる意欲を喚起させる教具
比較感情 体育に取り組む際に他者の様子が気になったり比較したくなったりする。	上手な子ばかりを見る。「〇〇さんは、上手にできているからいいよね。」	- 友達と比較するのではなく、児童本人の成長を見取り、声掛けする。 - 自分の力を見つめるようにさせる。(自己分析)	- 写真やビデオなどを基に、児童に自分の成長を感じさせる。 - 自分の成長を感じることができるとワークシートの工夫をする。	「前は、～だったけど、今は～になってきたね。上達しているね。」	自分自身の成長が分かる教具
劣等感情 体育に取り組む際に劣等感を感じる。	- あまりやりたがらない。 - 人前で演技等に恥ずかしさがみられる。「どうせ、できないもん。」	失敗への不安を取り除き、成功体験とそれまでの取組を尊重する。	初めに教師と練習するなどして失敗への不安や恥ずかしさを緩和するようにする。	「みんなと練習すればできるようになるよ。」 「失敗してもいいんだよ。次は〇〇に気を付けて、やってみよう。」	ねらいに応じた段階的な教具
嫌悪感情 体育に取り組む際に嫌悪感を感じる。	意欲があまりなく、投げ出すことがある。「もういやだ。やりたくない。」	その学習に意欲をもって取り組めるように、今できる技を取り入れた運動遊びなどを行う。	- やさしい場を設定し、自己の高まりを感じられるようにする。 - 意欲的になるような言葉掛けをしてくれる友達と同じグループで活動するようにする。	「これができるなんてすごいね。次は、〇〇に挑戦してみよう。」	特別な技術がなくても楽しめる教具

(3) 体育を苦手とする児童生徒に焦点を当てた小中高12年間の指導計画

器械運動領域は、特に「できる」、「できない」、「得意」、「苦手」、「好き」、「嫌い」等の個人差が大きい。したがって、小中高12年間を見通した指導を通して、個人差の軽減を目指す必要がある。そこで、意識調査等を基に、体育を苦手とする児童生徒の小中高12年間を見通した器械運動領域の指導計画を作成した（表5）。意識調査より、体育を苦手とする人は、「できるためのコツを分かりたい」、「友達同士で励まし合ったり学び合ったりしたい」と考えていることが分かった。そのため、「技術のポイントや動きのコツを見付け、楽しむ」ことを学習内容の中心に据えた。また、中学3年生以降では、将来にわたる「豊かなスポーツライフの実現」を目指して、発表会等の運営を行う指導計画を立てた。

表5 小中高 12 年間を見通した器械運動領域の指導計画（一部抜粋）

学年		小学 1・2 年	小学 3・4 年	小学 5・6 年	中学 1・2 年	中 3・高 1 年	高校 2・3 年
位置付け		各種の運動の基礎を培う時期		多くの領域の学習を経験する時期		卒業後に少なくとも一つの運動やスポーツを継続することができるようにする時期	
一般的特性		学校生活への慣れ		思春期の入り口		思春期	
意識調査結果	体育苦手の割合 (%)	男 8.1 %	12.1 %	4.8 %	16.8 %	8.1 %	12.2 %
		女 12.2 %	16.4 %	25.7 %	32.5 %	35.8 %	25.2 %
	苦手と思うようになった時期の割合	23.3 %	34.9 %	5.0 %	14.6 %	1.3 %	0.6 %
	意識調査から読み取れる傾向など	意欲的で、得意と感じる傾向が高いため、その教材の楽しさを十分に味わわせる。		苦手と思う児童が増えるため、運動遊びなどを取り入れ、「分かる」「できる」喜びを感じさせる必要がある。		特に女子において、苦手意識が高くなるため、女子が意欲的に活動できるように工夫が必要である。	
学習者同士の関係		自己中心的に活動するが、発明技や真似っこ遊びなどを学習に取り入れることで、互いの動きに興味を示し、関係性を豊かにする。		技能差が大きくなるが、友達の動きを分析し、伝えるなどの力がついてくる。この力を生かして、学習を進めていく。		生徒同士の心理的な距離感があり、繊細な時期である。ともに学習していく中で、互いの良さが分かり、つながりを深めていけるようにする。	
グループ学習の発展		教師主導で、子供たちの発想を生かして、一人一人を認め楽しみながら学習を進める。		教師の指導を基にして、グループで技術のポイントなどを科学的に学習し、「分かる」「できる」楽しさを味わえるよう授業を進める。		リーダーを中心に授業計画を立て、教師の指導によって修正しながら授業を進める。	
発達の特徴	身体運動面	神経系や敏捷性、運動に対する能力が発達。		筋肉や持久力、心肺機能が発達。技術を獲得しやすい時期。		第二次性徴開始。呼吸循環器系の発達。持久力や粘り強さ増加。	
	認識面	経験に基づいて自分なりに想像したり考えたりする。		リンパ型（免疫系・リンパ組織）の発達。身体と運動能力とのアンバランス。		自分の出来具合などを客観的な見方（自己を対象化）ができる。	
	社会性	子供同士の結び付きよりも親や教師との結び付きが強い。		抽象的思考や概念的思考、論理的思考が可能。		客観的な見方考え方や抽象的思考、論理的思考ができるようになる。主体的に考え行動できるようになる。	
器械運動で育てたい感覚		神経系や敏捷性、運動に対する能力が発達。		筋肉や持久力、心肺機能が発達。技術を獲得しやすい時期。		第二次性徴開始。呼吸循環器系の発達。持久力や粘り強さ増加。	
跳び箱運動	重点教材	◎跳び箱遊び ○横跳び越し		◎かかえ込み跳び ◎台上前転 ○横跳び越し		◎大きな台上前転 ◎首はね跳び ○横跳び越し ○かかえ込み跳び ○大きな開脚跳び	
	学習内容	いろいろな跳び箱遊びや横跳び越しをみんなで楽しむ。		かかえ込み跳びや台上前転の技術のポイントやコツを見付け、楽しむ。		大きな台上前転（頭はね跳びも含む）の技術のポイントやコツを見付け、楽しむ。	

4 検証授業とその考察

(1) 検証授業Ⅰの実際（平成 26 年 7 月実施 鹿児島市立草牟田小学校 4 年 1 組 29 人）

ア 検証授業Ⅰのねらい

体育を苦手とする児童に焦点を当てた授業モデルを活用するとともに、動きのコツを発見するためのグループ学習や「分かる」を促進させる教具の工夫を通して、苦手な児童の変容を見る。

イ 単元 器械運動 「マット運動」（全 7 時間）

ウ 単元の目標

- (ア) 逆さ感覚や腕支持の感覚を身に付け、側方倒立回転を中心とした連続技ができる。【技能】
- (イ) 「側方倒立回転ができるようになりたい」、「これまで学習した技を組み合わせで連続技の演技をしたい」などの願いをもち、進んで取り組み、友達と励まし合い、安全に気をつけて運動することができる。【態度】
- (ウ) どうすればよりきれいな側方倒立回転になるかななどを、友達の動きや自分の動きなどを分析し合い友達に伝えたり、活動を工夫したりすることができる。【思考・判断】

エ 児童の実態

児童の実態は次のとおりである。

(7) 診断の評価

a 質問紙法による分析（平成26年5月28日 調査人数28人 欠席1人）

項 目	回 答
① マット運動への興味・関心	【マット運動について (人)】
	とても得意 6 得意 10 どちらでもない 7 苦手 4 とても苦手 1
	【得意な理由 (人)】 ・ 技ができる 8 ・ 小さい頃からマット運動をしている 2 ・ 家でも練習している 2 ・ みんなで協力してできる 2 ・ 体を柔らかくするのが好き 1 ・ マット運動が楽しい 1
◇ 理由 (複数選択可)	【苦手な理由 (人)】 ・ 技ができない 5 ・ 難しい 1
② どのような学習にしたいか (複数回答可)	・ 側転などができるようになりたい 22 ・ 友達と協力しながら、みんなができるようになりたい 17 ・ できるためのコツをわかりたい 13 ・ けがなく安全に学習したい 12 ・ 汗をいっぱいかきたい 4 ・ 友達と競争したい 3 ・ 先生にほめられたい 3 ・ 友達にほめられたい 1 ・ その他 1 (できない友達に教えたい)

本学級の児童は、①については、「技ができる」などの理由でマット運動を得意とする児童が約半数であった。また、「技ができない」、「難しい」という理由で、苦手と答えている児童もいる。技ができないということが、児童の意欲を低下させているのではないかと考える。また、②については、マット運動を苦手とするほとんどの児童が、「側転などができるようになりたい」、「友達と協力しながら、みんなでできるようになりたい」という願いをもっている。授業においては、友達同士の学び合いを大切にして、技能向上を図っていく。

b ビデオ撮影による技能分析（平成26年5月28日 調査人数28人 欠席1人）

事前に児童の側方倒立回転をビデオ撮影し、ビデオ分析により一人一人の実態を把握した。

側方倒立回転について (人)				◎	5	○	11	△	10	●	2
◎ 足も伸びて、腰の位置が高い安定している											
○ 腕支持の感覚や逆さ感覚は身に付いているが、足は伸びておらず、体が斜めに倒れている											
△ 側方倒立回転への入りの腰が低く、腕支持の感覚が養われていない											
● 手のつく場所や順序などやり方が分からない											
壁倒立について (人)				◎	10	●	18				
◎ できる ● できない											

12 人の児童は側方倒立回転ができていない。また、11 人の児童は、腰や足を十分に上げることができていない。また、18 人の児童が壁倒立をできていないため側方倒立回転の技術獲得に向けて、壁倒立を練習しながら側方倒立回転につなげていく。

(1) 形成的評價

a 質問紙法による分析（平成26年6月25日 調査人数29人）

側方倒立回転の難しい点	・ 足やおしりが上がらない 11 ・ 体が斜めになってしまう 3 ・ どこをみればよいか分からない 1 ・ 最初から最後まで回るのが難しい 1	・ 足が曲がってしまう 7 ・ バランスを保つこと 1 ・ きれいな形にするのが難しい 1 ・ その他 4
-------------	--	--

側方倒立回転の難しさについては、「足やおしりが上がらない」という逆感覚や腕支持の感覚を挙げている児童が多い。また、マット運動を苦手とする児童においては、運動経験の少ない児童もいるため、単元を通して「かえるの足打ち」や「壁倒立」などの感覚を継続的に養っていく必要がある。

b 教師による児童分析（平成26年6月25日 調査人数6人）

苦手意識をもつ児童について	【児童K】	マット運動に対して苦手意識はあるが、うまくなりたいという気持ちがあり意欲的である。優しく友達思いである。体が大きい。
	【児童S】	素直で一生懸命授業に取り組む。壁倒立では足や腰が上がらない。
	【児童M】	意欲的である。倒立では、後から振り上げる足が上がらない。
	【児童O】	体が硬く、足や腰が上がらない。着手場所などが分からず前に回転してしまふ。スモールステップでの指導が特に必要である。
	【児童J】	明るく元気で意欲的で努力家である。足が上がっていない。
	【児童H】	できるようになりたいという思いはある。足が上がらず回転力が足りない。

マット運動を苦手とする児童については、授業において積極的な称賛や激励をしたり、小さな成長を喜び合ったりしていく。また、共感的な温かい雰囲気でのグループ学習を目指す。

オ 検証授業Ⅰの重点

(ア) 「できる」ための「分かる」を促進させる教具の工夫

「体育における教具」について、丸山*6)は、「常に目の前の子どもの実態を直視して、彼らに合った教材を開発していく必要がある」とし、「教材によって方向付けられ意味づけられた道具、学習内容を強調したり引き出したりするための物体」と述べている。また、出原*7)は、「子どもたちの認識を引き出し、交流させるための道具、『わからせるための道具』が教具である」と述べている。

この丸山、出原の視点を基に教具の工夫をした。まずは、児童の実態把握に努め、次に膝の伸びたきれいな側方倒立回転に必要な体の使い方やつまづきを解決する動きにつながることを意識しながら教具を作成した。次の図は、「分かる」を促進させる教具と活用法である(図17)。

教具名・写真	教具の目的・活用法
 【日本代表テープ】	手を真横からピンと上げることで、肩甲骨が寄って、日本代表テープにしわが寄る。次に、両手を頭の後ろにグッと持っていき、胸を張る。こうすることで、体の締めを意識的に作り出す。日本代表テープにしわを寄せることで、体の締めを作り、側転やハンドスプリングが大きくきれいにできるようになる。
 【手型足型カード】	上手な友達や自分の側転がどうなっているのかを、手型足型カードを使って調べる。上手な友達の側転は、手型足型カードが真っ直ぐ、等間隔に並んでいることに気付かせる。また、自分の手型足型をグループの友達に、自分の手足が着いた場所に置いてもらい、真っ直ぐ並ぶようにするためのコツを考えさせる。
 【魔法のゴム】	側転を中心とした連続技などを行う場合、次の技へのつなぎをスムーズに行わせたい。この課題を解決するために、手の指にゴムを着ける。そして、ゴムをずっと見続けることを意識して、側転の練習を行う。側転後、「手を前に！」と声掛けをすると、次の動きにも更につながりやすくなる。
 【足にスズランテープ】	側転の美しさをスズランテープの音や軌跡から判断できるのではないかと考え、足にスズランテープをつけて練習を行った。上手な側転は「スー」という音がする。上手でない側転は、「ザザー」という音がする。また、上手な側転のスズランテープの軌跡は、弧を描いているようになるが、上手でない側転は弧を描かない。
 【鈴付ゴムひも】	腰や膝を伸ばしたり、腰や足を高く上げたりするために、鈴付のゴムひもを使う。ゴムの高さを少しずつ高くして側転の練習をする。足を上げることを意識するが、「おしりを持ち上げる」ことを意識する方が、よりきれいにできる児童もいた。両手を上に挙げたときの指先の高さまで（バンザイの高さ）できれば、大きな側転と言える。

図17 「分かる」を促進させる教具と活用法

*6) 丸山真司・岩田靖 『体育における教具とは 体育科教育』 2012年 大修館書店
 *7) 出原泰明 編著 『体育の授業方法論』 1991年 大修館書店

- (イ) 動きのコツを発見するためのグループ学習
側方倒立回転の技術獲得や技能向上を目指し、異質集団でのグループ学習を行った。様々な教具を使い、グループで互いの演技を確認し合い、良い点や改善点などを話し合った(写真1)。



写真1 グループで活動している様子

カ 評価規準

関心・意欲・態度	① 技ができる楽しさや喜びに触れることができるよう、マット運動に進んで取り組み、最後まで努力している。 ② マットの使い方や運動の行い方のきまりを守り、友達と励まし合って運動しようとしている。 ③ 友達と協力して、マットの準備や片付けをしようとしている。 ④ 運動する場やマットの使い方などの安全を確かめようとしている。
思考・判断	① 基本的な技の動き方や技のポイントを知るとともに、自分や友達の力に合う課題を選んでいる。 ② 基本的な技の練習の仕方を知るとともに、自分や友達の力に合った練習方法や練習の場を選んでいる。
技能	① 自分の力に合った基本的な回転技や倒立技ができる。

キ 単元指導計画

時間	1		2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 (本時)				7
道筋	つかむ・見通す		挑 戦 す る ・ 工 夫 す る				生かす
学 習 内 容	これまで学習した技をやってみる。		安定した側方倒立回転のコツを見つけ、連続技の発表会を楽しもう。				発表会を楽しもう。
	前転のコツは何だろうか。		【感覚づくり】動物歩き、かえるの足打ち、壁倒立、川跳びなど				
			膝の伸びた側方倒立回転をするには、どうすればよいだろう。		側方倒立回転を中心とした連続技を練習しよう。		
児童のつまずきと手立て	つまずき	ア まっすぐ回れない。	ア 手、足のつき方や順序が分からない。 イ 腰や足が頭よりも上がらない。 ウ 真っ直ぐとした側方倒立回転にならない。 エ どこに力を入れたら良いのかが分からない。 オ 壁倒立では正面に向かって倒立していたが、側方倒立回転では側方に着手するため、体をひねることが難しい。				
		イ 手を使わず立ち上がれない。					
	手立て	ア 腰を高くするために、「手と足を近付けて」と声掛けをする。 イ 勢いをつけて回するために腰を高くし「ピーン、キュ」のリズムで回る。	ア 順番をはっきり意識させるために、手手足足のリズムで、川跳びなどを行うようにする。 イ かえるの足打ちやゴムひも、鈴付きゴムひもを使って、腰や足を高く上げる感覚づくりをする。 ウ 手型足型カードなどを使い、自分の側方倒立回転がどうなっているかを捉えさせ、まっすぐ回転するように意識させる。 エ 側方倒立回転や壁倒立の動きの直前の姿勢を、体の締めを作り出すために、手を横にあげることによって肩甲骨を寄せ、胸を張らせるようにし、そのまま耳をはさむように体と腕の角度が一直線にする。 オ 手型足型カードを使って、足の先に手を横にして着くことを意識させる。				
		※ つまずきアに対しては、手立てアが対応している。					
評価機会	関		①	④	③	②	②
	思	①	②	①		①	
	技	①			①		①

ク 実際

(ア) 目標

側方倒立回転を行うための技術のポイント等をグループで確認し、膝が伸びたきれいな側方倒立回転を楽しむことができる。【技能】

(イ) 学習過程

過程	主 な 学 習 活 動	時間 (分)	○：教師の具体的な働き掛け ※：学習指導上の重点 □：指導上の留意点
つかむ・見通す	1 準備運動をする。  【かえるの足打ちを練習する様子】 2 技能が向上した児童の姿をビデオ映像から確認する。 3 本時のめあてについて話し合う。 □ きれいな側方倒立回転を研究して、練習方法を考え、練習をし、側方倒立回転を楽しもう。	10	○ 安全に気を付けるために、マットの運び方や活動場所、活動する際の注意事項を確認する。 ※ かえるの足打ち、ねこちゃん体操などを行うことで、側方倒立回転に必要な動きの感覚を身に付けさせる。【重点1】 ○ 「腰が上がらない」、「手や足の順番が分からない」など児童の側方倒立回転を分析する視点を与える。
	4 グループで困っている友達の側方倒立回転を分析し、必要な練習を話し合う。 (1) 友達の側方倒立回転を分析する。  【手型足型カードを確認する様子】 (2) 練習方法を考え、練習する。  【鈴付きゴムひもで練習する様子】 5 互いの練習の成果を発表し合う。  【友達の成長を全員で確認する様子】	25	※ 自分の側方倒立回転の手と足の着いた位置を確認するために、手型足型カードを置かせる。【重点2】 ※ きれいな側転を目指すために、手型足型を一直線にするためには、どうすればよいかをグループで考えさせる。【重点3】 □ 膝をピンと伸ばすために、ゴムひもを使って練習する。バンザイの高さまでできることが理想的である。 ○ 練習に困っている場合は、これまでの学習を振り返らせ、助言する。 ○ よりよい動きにするために一生懸命練習しているので、温かい声掛けをするようにさせる。 □ 児童の練習の成果を全員で確認し、友達の助言内容や自分が気を付けたことなどを発表させる。 ○ 側方倒立回転を苦手とする児童が成長を感じられるように、グループで、よかった点などについて発表させる。
生かす	6 整理運動をする。 7 本時の学習を振り返り、互いの成長を発表し合い、思いを共有する。	10	○ 手首や足首など、主に使った部位を入念にストレッチをさせる。 ○ できたことや分かったことを振り返らせ、友達の助言内容のシェアリングをすることで、互いの意欲の向上につなげる。

ケ 検証授業Ⅰの考察

(ア) 体育に対する好きの度合いの変容とその理由

特に体育を苦手とする児童群において好きの度合いが増加したことが分かる(図18)。また、苦手群の好きの度合いが増加した理由として、「これまでできなかった技ができるようになった」、「コツが分かった」、「前より上手になったと感じた」が多かったことから、動きのコツを発見するために、グループ学習を取り入れることや「分かる」を促進させる教具の工夫をすることは、有効であったと考えられる(図19)。

(イ) 「分かる」を促進させる教具の工夫について

児童にとってどの教具が「分かる」を促進させたかを、調査用紙を活用し、5段階で評価させた(図20)。児童には、足や腰を高く上げるための鈴付きのゴムや体の締めを意識的に作り出す日本代表テープが効果的であったのが分かる。しかし、スズランテープは、音で判断するのは難しいなどの理由から、あまり効果的ではなかった。児童にとって、客観的に見やすく意識しやすい教具が望ましいと言える。

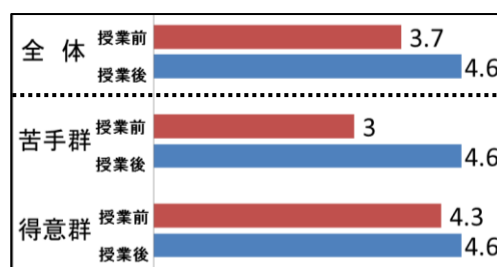


図18 体育に対する好きの度合い(5段階)

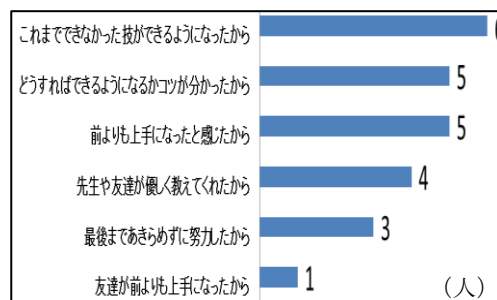


図19 好きの度合いが増加した理由(苦手群)

教具名	日本代表テープ	手型足型カード	魔法のゴム	スズランテープ(足)	鈴付ゴムひも
教具(写真)					
評価	4.5	4.2	3.4	2.9	4.8

図20 「分かる」を促進させる教具についての児童の評価

(ウ) 運動の技術のポイントは「分かる」けれども、うまく「できない」児童について

「側転をする時、足が上がらず転がってしまいます。肩の骨をよせて、手をピンと伸ばして始めているのに、うまくできません。」(「児童」体育ノート」より)

児童Jのように、分かっているけれどもうまくできないという状況の児童が苦手群に見られた。グループ学習における学び合いの時間を確保しながら、自分なりの動きのコツをつかませ、「できる」ようにさせることが課題と考えられる。

コ 検証授業Ⅰの成果と課題

成果	○ 学習指導改善の重点を基にしたことで、体育を苦手とする児童は技能向上が見られ、自分の成長を感じることができ、より体育好きになった。また、得意とする児童についても、教えた友達が上手になった姿などから、より体育好きになった。
課題	○ 体育を苦手とする児童にとって、運動の技術のポイントは分かっているが、できない状況が見られたため、自分なりの動きのコツをいかに発見し、「できる」ようになるかが課題である。 ○ 学習指導改善の重点が児童の運動有能感へどのような影響を与えたかを検証することができなかった。 ○ 学習指導改善の重点を基に学習を進めてきたが、体育を苦手とする児童の情意面への手立てがやや足りなかった。

(2) 検証授業Ⅱの実際（平成 26 年 11 月実施 鹿児島市立草牟田小学校 4 年 1 組 29 人）

ア 検証授業Ⅱのねらい

児童の体育に関する苦手意識を分析し、「苦手意識に基づく指導の方向性」を参考に具体的な手立てを講じる。また、授業モデルを活用することで、児童は「分かる」、「できる」喜びを感じ、苦手意識は低下し、運動有能感が高まり、より体育好きな児童へ変容していくことを検証する。

イ 単元 器械運動 「跳び箱運動」（全 6 時間）

ウ 単元の目標

- (ア) 腰の位置を高く保った台上前転やその発展技である膝を伸ばした台上前転ができる。【技能】
- (イ) 「台上前転ができるようになりたい」などの願いをもち、台上前転を進んで取り組み、きまりを守り、友達と励まし合い、安全に気を付けて運動することができる。【態度】
- (ウ) どうすれば腰の位置を高く保った台上前転ができるかななどを、友達の動きや自分の動きなどを分析し合い、友達に伝えたり、活動を工夫したりすることができる。【思考・判断】

エ 児童の実態

児童の実態は以下のとおりである（平成 26 年 9 月 29 日 調査人数 29 人）。

(ア) 跳び箱運動に関する興味・関心について（質問紙法）

項 目	回 答				
① 跳び箱運動への興味・関心	【跳び箱運動について（人）】				
	とても得意 4	得意 10	どちらでもない 8	苦手 7	とても苦手 0
	【得意な理由（人）】 ・ 高い段が跳べる 6 ・ 習い事をしている 2 ・ できる跳び方もある 2 ・ ある程度できる 2 ・ 保育園の頃にしていた 1 ・ 気持ちやすっきりする 1 ・ 閉脚跳びなどもできる 1 ・ 3 年生の時期にできていた 1 【苦手な理由（人）】 ・ できないことがある 5 ・ けがが怖い 4				
◇ 理 由 (複数選択可)					

本学級の児童は、①については、「高い段が跳べる」などの理由で跳び箱運動を得意とする児童が約半数であった。また、「できないことがある」、「けがが怖い」という理由で、苦手と答えている児童もいる。技ができないということが、児童の意欲を低下させていると考えられる。また、学習を進めるにあたり、児童に怖さを感じさせない工夫も必要である。

(イ) 技能について（ビデオによる分析）

台上前転についての技能調査（人）	◎	3	○	11	△	15
◎ 助走から両足で踏み切り、腰の位置を高く保って着手し、前方に回転しながら体を開いて着地する。						
○ 助走から両足で踏み切り、腰の位置を低く保って着手し、前方に回転する。						
△ 助走から両足で踏み切るが、腰が高く上らず着手し、前方に回転できない。						

技能については、15 人の児童は台上前転ができていない。この 15 人の児童は、腰の位置を高く保つことができていないため、跳び箱の上で回ることができていない。また、11 人の児童は、何とか台上前転ができていますが、頭頂部で回るなど安定感に欠けている。これらの児童には、踏み切り時に、腰を高く上げることを意識させることが大切と言える。台上前転の技能向上に向けて、腰を高く保つための練習を繰り返しながら、踏み切りを生かした腰の位置の高い台上前転につなげていく。

(ウ) 苦手意識について（質問紙法）

児童の体育を苦手と思う要因を「回避感情」、「比較感情」、「劣等感感情」、「嫌悪感情」の下位尺度からなる「体育授業への苦手意識測定尺度」を用いて、本学級の児童の苦手意

識を分析した。「回避感情」は20点満点、「比較感情」は15点満点、「劣等感感情」は20点満点、「嫌悪感情」は15点満点である。それぞれの合計が異なるため、得点だけでの比較は難しいと考え、百分率で表し、各下位尺度の比較を行った。百分率で表すための計算方法は表6のとおりである。

表6 各下位尺度の百分率での計算方法（児童Aの場合）

下位尺度	回避感情	比較感情	劣等感感情	嫌悪感情
点数	10	8	19	13
満点	20	15	20	15
計算方法	点数÷満点×100(小数第2位四捨五入)			
百分率	50	53.3	95	86.7

この計算方法を用いた結果が表7のとおりである。矢印(↑)は、特に数値が高い苦手意識の下位尺度を示す。なお、数値が高い方が、苦手意識が高いと捉える。さらに、単元終了時に、この数値が下がることを目指した。

表7 児童の苦手意識について数値化した表(%)

下位尺度	回避感情	比較感情	劣等感感情	嫌悪感情
児童A	50	53.3	95	86.7
児童K	45	53.3	65	80
児童S	50	80	60	60
児童T	70	80	85	86.7
児童H	70	40	70	60
5人の児童 平均	57	61.3	75 ↑	74.7 ↑
学級 平均	37	53.3 ↑	44.5 ↑	40.0

児童Aから児童Hは、跳び箱運動を苦手とし、苦手意識の分析においても高い値を示したため、この5人を抽出した。本学級の児童の体育に関する苦手意識の下位尺度では、比較感情や劣等感感情が高いと言える。また、5人の児童については、特に、劣等感感情や嫌悪感情が高いと言える。そのため、「苦手意識に基づく指導の要件」を参考に具体的手立てを講じる必要がある。

(エ) 運動有能感について(質問紙法)

児童の運動有能感について調査した結果、表8のとおりとなった。矢印(↓)は、5人の児童や学級において特に低く、課題となる下位尺度を指す。なお数値が高い方が、運動有能感が高い。授業後には、授業前よりもこの数値が上がる方が望ましい。

5人の児童は、(ウ)で示した児童と同じ児童であり、運動有能感も低い。この5人の平均は、身体的有能さの認知、統制感、受容感の値ともに学級平均より低い値を示した。特に、身体的有能さの認知の値が平均値よりも低い。この結果から、苦手な児童には、グループ学習を通して友達とともに練習する中で、できる喜びや自分の成長を実感させることが大切であると考えられる。

表8 児童の運動有能感を数値化した表(%)

下位尺度	身体的有能さの認知	統制感	受容感	運動有能感 (3つの下位尺度の平均)
児童A	40	85	20	48.3
児童K	40	70	75	61.7
児童S	50	65	75	63.3
児童T	55	90	85	76.7
児童H	60	50	55	55
5人の児童 平均	49 ↓	72	62 ↓	61
学級 平均	64.5 ↓	84.5	73 ↓	74

オ 検証授業Ⅱの重点

検証授業Ⅱにおける学習指導改善の重点を以下のとおりとした。

【 学習指導改善の重点 】

- 重点1：主運動につながる運動遊びの導入
- 重点2：『できる』ための『分かる』を促進させるための教具の工夫
- 重点3：グループ学習の工夫
- 重点4：苦手意識を低下させる手立て
- 重点5：運動有能感を高める手立て

(7) 体育を苦手とする児童に焦点を当てた授業モデル（検証授業Ⅱ）

検証授業Ⅱの授業モデルは、重点4と重点5を加えて図21のとおりとした。

検証授業Ⅱにおいて、重点4、重点5では、学習前に質問紙によって児童の「苦手意識」や「運動有能感」について分析した。特に、顕著な結果を示した下位尺度に焦点を当て指導の改善を図った。例えば、重点4では、下位尺度ごとに指導方針や働き掛けなどについて整理した「苦手意識を踏まえた指導の方向性」（表4）を授業の各場面で活用する。また、重点5では、下位尺度ごとに運動有能感を高めるために、跳び箱運動における技の系統性を明らかにしたり、課題をスモールステップ化したりするなど、具体的な手立てを授業の各場面で講じたい。

体育を苦手とする児童の情意面を十分把握し、重点4、重点5の中で当てはまる手立てを講じることとした。

(4) 苦手意識を低下させる手立て（重点4）

跳び箱運動を苦手とする児童は、劣等感感情や嫌悪感情が高いことが「体育授業への苦手意識測定尺度」を用いた調査による結果から分かった。そこで、劣等感感情と嫌悪感情の高い児童に焦点を当て、「苦手意識を踏まえた指導の方向性」を参考に次のような手立てを講じた。

a 劣等感感情が高い児童への手立て

- 成功体験やそれまでの本人の努力を尊重するために、次のような肯定的言葉掛けや体育ノートに次時への意欲化につながる返事をするように努めた（写真2）。

- ・ 「みんなと練習すればできるようになるよ。」
- ・ 「失敗してもいいんだよ。次は○○に気を付けて、やってみよう。」
- ・ 「はじめがあったからこそ、できるようになったね。」

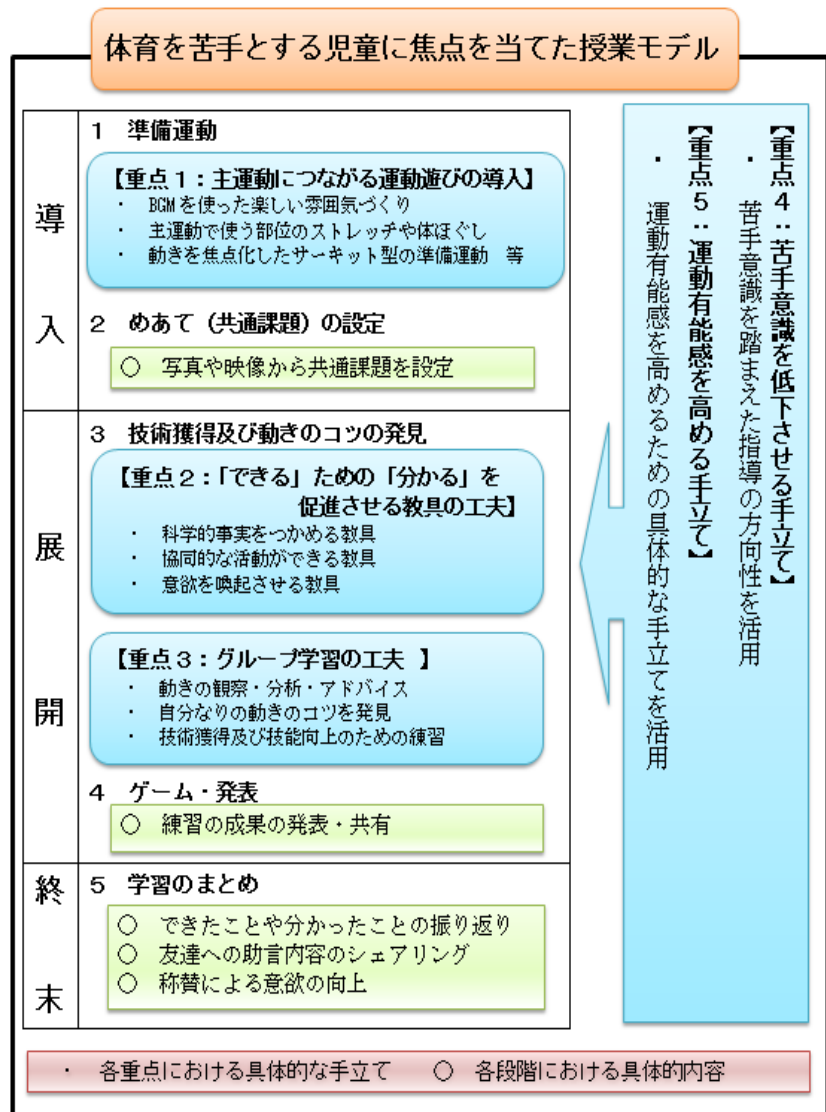


図21 体育を苦手とする児童に焦点を当てた授業モデルⅡ

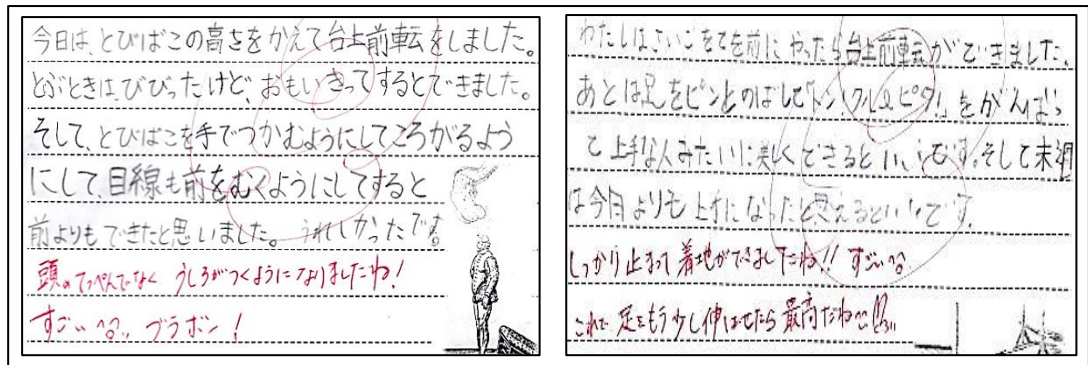


写真2 体育ノートへの返事の実際

- 単元の前半部分では、台上前転への失敗に対する不安を緩和するために、安全に配慮し、教師と練習した(写真3)。また、台上前転の最終局面の落ちる感覚を養う練習を体育館のステージを利用して行った(写真4)。



写真3 失敗への不安を緩和するために教師と練習する様子



写真4 落ちる感覚を養う練習の様子

b 嫌悪感情の高い児童への手立て

- 意欲的に活動させるために、児童の意欲を喚起させるような教具を用いて練習した。膝を伸ばした台上前転を目指すために、棒に吊したボールを足の指先や足の裏で蹴り出す練習を行った。膝を伸ばすためには、バレリーナの足のよう指先までピンと伸ばすことや踏み切ってすぐに膝を伸ばすことなどを、練習前に確認した(写真5)。
- 自己の高まりを感じさせるために、やさしい場を設定しスモールステップにより練習を行った。



写真5 膝を伸ばすことを意識させるための教具

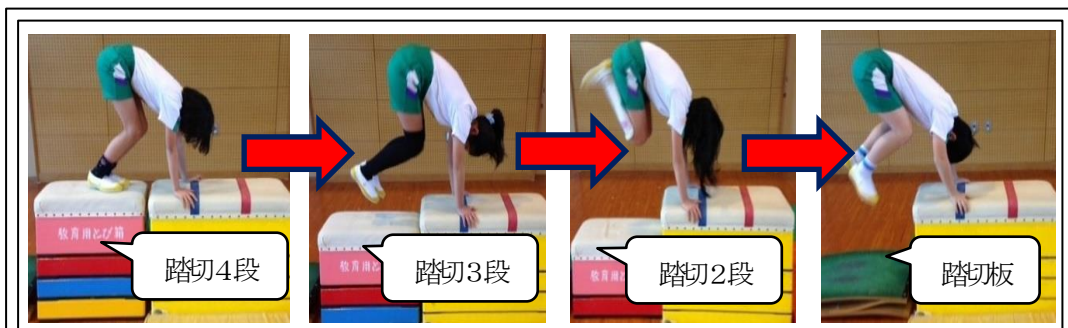


写真6 台上前転の練習段階

連結した跳び箱の前を1段ずつ下げていき、踏み切り・空中での回転の感覚を養った。嫌悪感情の高い児童も、1段ずつ踏切の段が下がるため、自己の高まりを感じることができ、自信につながった。また、児童が学習に見通しをもって取り組めた。

- 学習に意欲的に取り組ませるために、1 単位時間の導入段階において、主運動につながる運動遊びを取り入れた。

写 真	ねらい・動き方・リズム	
 跳び乗り	ねらい	両足をそろえて強く踏み切り、跳び箱に足の裏で跳び乗ることができる。
	動き方	「ピョーン」で大きくジャンプ、「ピョン」で両足そろえて力強く踏み切る。両膝をキュッと胸に引き付け、足の裏で跳び箱に跳び乗る。
	リズム	「1 歩下げて～、ピョーンピョン！」
 跳び降り	ねらい	空中姿勢を創作し、安定した着地ができる。
	動き方	大の字、ひねり、ウルトラマンなど、自由に空中姿勢を創作する。膝を柔らかく曲げて、前を見て、手でバランスを取り着地する。
	リズム	「ジャンプ、ふわっと着地。」
 平均台でピョンピョン	ねらい	平均台に手を着き、両手で支えて、腰を高く上げて前進することができる。
	動き方	平均台に手をつき、腰を高く上げることを意識して、左右へ跳び越す。リズムよく腰を上げ、前進する。
	リズム	「ピョンピョン、ピョンピョン」
 セーフティマット前転	ねらい	助走から両足で踏み切り、セーフティマットで腰を高く上げた前転ができる。
	動き方	助走から、両足で踏み切り、腰を高く上げ手について、前転する。
	リズム	「ピョン、クルッ。」「ピョン、ピン、クルッ。」
 横跳び越し	ねらい	腰の位置の高い横跳び越しができる（台上前転や開脚跳び、かかえ込み跳びの腰を上げる感覚を養うため）。
	動き方	両足での強い踏み切りから、腰を高く引き上げ、肘を伸ばして体を支え、跳び箱を見続けて着地する。空中でできるだけ長くいられるようにする。
	リズム	「さざんが～キュッ！」
 ねこちゃん体操（一部）	ねらい	腹筋に力を入れて体をしめたり、リラックスさせたりと、筋肉の弛緩させることができる。
	動き方	「フッ！」で、おなかを見て、背中を丸く、高くする。腹筋に力を入れて体をしめる。「ハッ！」で、上を見て背中を反らす。
	リズム	「ねこちゃんが怒ったフッ！ハッ！」（5～10 回）
 カエルの足打ち	ねらい	腕で体を支え、腰を高く上げ、足打ちを2～3 回することができる。
	動き方	手と手の間を見て、体を支え、腰の高い状態で、足打ちを2～3 回行う。
	リズム	「ピョン・タタ・トン・パッ！」

(ウ) 運動有能感を高める手立て(重点5)

運動有能感を高める手立てとして、表9を参考にした。実態調査から、「身体的有能さの認知」と「受容感」が低かったことから、友達や先生との関わりを大切にして、「できる」へとつながっていった。

表9 運動有能感を高める手立て

身体的有能さの認知	- 技術の系統性と基礎技術の明確化 - 自分や友達の成長を感じる発表の場の設定
統制感	- 課題のモジュールステップ化 「分かる(技術認識)」を高める教具・ワークシート等
受容感	- 友達の「できた」をみんなで喜び合えるグループづくり - 教師による体育ノートへの肯定的なコメント

a 「身体的有能さの認知」を高める手立て

運動技能に関する自信をもたせるために、技の系統性を明確にして指導した(図22)。特に、「台上前転に必要な三つの基礎感覚」(図23)の「腰を高く引き上げる感覚」を大切に、導入時の主運動につながる運動遊びの中に多く取り入れた。

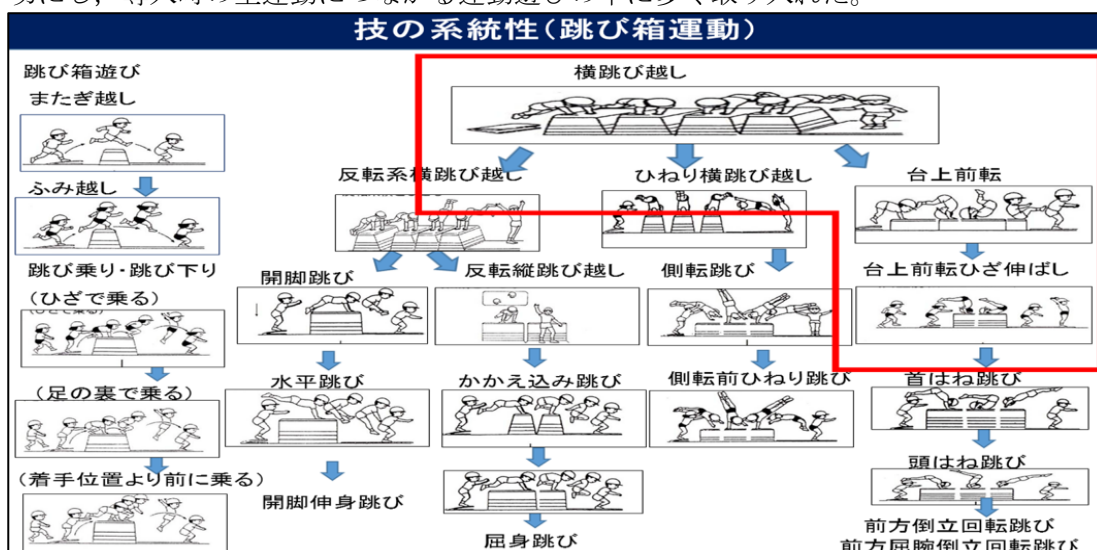


図22 技の系統図(跳び箱運動)

【 台上前転に必要な三つの基礎感覚 】

- 腰を高く引き・・・ 台上前転で一番難しい点は、跳び箱の上で前転を行うために、助走と踏み切りを生かして腰を高く引き上げることである。
- 腕支持感覚・・・ 台上前転時に両腕で体重を支えることで、真っ直ぐ回ることができる。片方に体重がかかると、跳び箱の横から落ちてしまう。
- 回転感覚・・・ 跳び箱の上での前転を行うためには、まず、マット上で真っ直ぐ前転ができることが大切である。

図23 台上前転に必要な三つの基礎感覚

b 「受容感」を高める手立て

跳び箱運動の学習を進めるに当たり、山内^{*8)}による「グループ学習の発展段階」を参考にした(表10)。授業学年が小学4年生であることや「台上前転」の技術獲得を目指すことなどを考慮し、表10の4「教え合いができるようになってきた時期」と捉えて、「教師も含め、みんなで研究し、みんなで、できていく楽しさを味わう」ことをグループで目指した。また、互いの動

表10 グループ学習の発展段階について

クラス集団としての力量	学習の方法	ねがい・ねらい・授業形態
1 パラパラ期	教師主導	その教材のた伊佐を味わわせる。
2 おもしろくなってきた時期(グループいっしょの行動をする)	子どもたちの発想を大事にする	発明・発想・個性をすべて認め、学習を進めながら学習観・教材観・技術感覚を楽しむながら力をつける。
3 みんなでつくることができるようになってきた時期(同一行動がとれる)	子どもたちでつくる	能力差のある子どもたちが、みんなであって、みんなで直技する楽しさを味わう。
4 教え合いができるようになってきた時期	教師主導のポイント研究	教師を含め、みんなで研究し、みんなでできていく楽しさを味わう。
5 自分たちでポイント研究ができるようになってきた時期(グループ学習展開)	グループでポイント研究	教師のアドバイスをもとに、教材(もとになるスポーツ)の技術を科学的に学習し、表現の幅を広げていく楽しさを味わう。
6 自分たちで授業計画を立て、運営できるようになってきた時期(クラス全体が主体的にグループ学習に取り組む)	リーダー中心に計画を立て、教師のアドバイスによって修正しながら授業を進める	個人の願いやグループの願い・問題点を学級全体のものとして捉え、教師のアドバイスを受けて、文化の継承、発展者としての力をつけることをめざして、主体的に授業を進める。

*8) 山内基広 編著 『大好きになる体育の授業』 2007年 日本標準

きを分析したり教え合ったりし、活動に深まりをもたせるために、具体的な事実を伝えると同時に肯定的な言葉掛けをするようにした。

c 「統制感」を高める手立て

努力すればできるという自信につなげるために、課題をスモールステップ化し、小さな成功体験を積み重ねていった。また、「できる」と「分かる」をつなげ、技術を獲得するために必要な技術認識を高めた。

カ 評価規準

関心・意欲・態度	① 技ができる楽しさや喜びに触れることができるよう、跳び箱運動に進んで取り組み、最後まで努力している。 ② 跳び箱の使い方や運動の行い方のきまりを守り、友達と励まし合って運動しようとしている。 ③ 友達と協力して、跳び箱等の準備や片付けをしようとしている。 ④ 運動する場や跳び箱の使い方などの安全を確かめようとしている。
思考・判断	① 基本的な技の動き方や技のポイントを知るとともに、友達や自分の動きなどを分析している。 ② 基本的な技の練習の仕方を知るとともに、自分の力に合った練習方法や練習の場を選んでいる。
技能	① 自分の力に合った基本的な支持跳び越し技ができる。

キ 単元指導計画

時間	1・2		3	4	5（本時）	6
過程	つかむ・見通す		挑 戦 す る ・ 工 夫 す る			生かす
学 習 内 容	【感覚づくり】 かえるの足打ち、跳び箱への跳び乗り・跳び降り など					発表会を楽しもう。
	台上前転の基礎となる横跳び越しの練習を行う。		両足で踏み切り、膝を伸ばした台上前転を目指そう。			
			台上前転の技術のポイントは何だろう。			
	ふわっと横跳び越しをするために、何が大切だろう。		腰を高く上げるためには、何が大切だろう。		膝を伸ばして台上前転するためには、どこに力を入れればよいだろう。	
児童のつまずきと手立て	つまづき	ア 腰が高く上がらない。 イ 踏み切りを両足で力強くできない。	ア 腰が高く上がらない。 イ 踏み切り時に、両足で力強く踏み切れていない。 ウ 頭頂部が跳び箱に着くため、安定感が無い。 エ 両腕で均等に支えられないため、真っ直ぐ回ることができない。 オ 指先までピンと伸ばした台上前転になっていない。			
	手立て	ア 視線を確保し、跳び箱を見続けるように声掛けする。 イ 踏み切る一歩前を大きくし、勢いよく踏み切る。	ア 横跳び越しの練習を継続的に行い、腰を高く上げる感覚を養う。 イ 跳び箱への跳び乗りを行い、両足踏み切りの感覚を養う。 ウ 腰を上げると同時に、おへそを見て体を丸めて回るようにする。 エ 跳び箱への跳び乗りを通して着手の仕方を覚えさせる。また、体重が均等にかかるように、両足で踏み切るようにさせる。 オ 鈴付のボールを屈きそうな高さに置き、指先まで伸ばすことを意識させる。			
評価機会	関	①		②	③	④
	思		①	②	①	
	技	①				①

ク 実際

(7) 目標

膝を伸ばして台上前転を行うためのポイントを知るとともに、膝を伸ばした状態で着手して台上前転をすることができる。【技能】

(イ) 学習過程

過程	主 な 学 習 活 動	時間 (分)	○：教師の具体的な働き掛け ※：学習指導上の重点 □：指導上の留意点 □：児童の言葉
つかむ・見通す	1 準備運動をする。  【横跳び越しをする児童】	10	※ BGMを使って準備運動を行わせることで、楽しく意欲的に運動に取り組むことができるようにする。【重点1】 横跳び越しは、「サザンがキュッ！」のリズムで、おしりを高く、両足を胸に引きつけることを意識させる。
	2 ビデオ映像等を基に、本時のめあてについて話し合う。 膝を伸ばした自分なりの台上前転を楽しもう。		○ ビデオ映像から台上前転の比較をさせ、大きな台上前転を目指すためには、どうすればよいかを考えさせる。
挑戦する・工夫する	3 膝を伸ばした台上前転を目指して練習する。 (1) いつから膝を伸ばせばよいかを、友達の動きなどから考える。  【上手な友達の台上前転】	25	○ 上手な児童の動きを基に、いつから膝を伸ばしているかを考えることができるようにする。 いつから膝を伸ばしているかを予想させ、実際の様子で確認する。 ※ 上手な児童が、踏み切り後すぐに膝を伸ばしていることに気付かせ、練習する際に意識させる。【重点5】
	・ 踏み切った瞬間から膝が伸びている。 ・ バレリーナの足をイメージするとできそうだね。 (2) グループで膝を伸ばした台上前転の練習を行う。  【膝を伸ばした台上前転を練習する児童】		※ 嫌悪感情の高い児童には、自分の成長を感じさせるために、ボールの位置を低い高さから練習し、少しずつ慣れさせていく。また、「すごい。当たったね。次はこの高さも当てられるかな。」など、意欲を喚起させる言葉掛けを行う。【重点4】 ※ 劣等感情の高い児童には、恥ずかしさを緩和させるために教師と共に練習する。また、「失敗してもいいんだよ。」など、安心してできるような言葉掛けを行う。【重点4】 ※ 目標となる教具（ボールを吊るしたもの）を使って練習をさせることで、膝を伸ばすことを意識できるようにする。【重点2】 各グループで、膝を伸ばすことを意識させるために、教具を使う。
生かす	4 互いの練習の成果を発表し合う。  【練習の成果を発表する様子】		※ 膝が伸びているかという視点で観察させることで、練習の成果を確認できるようにし、運動技能に関する自信をもたせる。【重点3・5】 特に跳び箱運動を苦手とする児童の動きの高まりを紹介することで、自分に合った練習をすれば上手になることやグループで学ぶことの良さを実感できるようにする。
	5 本時の学習を振り返り、互いの成長を発表し合う。 6 整理運動をする。	10	○ どんな助言で上手になったかななどを発表させ、助言内容等をシェアリングする。 ○ 次時への意欲向上につなげるため、互いの成長について発表させ、互いに称賛し合うようにする。

ケ 検証授業Ⅱの考察

(ア) 体育を苦手とする児童の変容

a 体育に対する好きの度合いの変容とその理由

体育に対する好きの度合いを検証授業Ⅱ前後に調査し、比較した(図24)。苦手群・得意群ともに好きの度合いがともに、0.6ポイント増加した。苦手群の好きの度合いが増加した理由として、「自分が前よりも上手になったから」、「失敗への不安がなくなり、安心してできたから」が多かった(図25)。これは、苦手因子に基づく指導の要件を基に、段階的な指導を行ったため、児童は自分の成長を感じることができたと考えられる。また、初めに教師と練習するなどして失敗への不安や恥ずかしさを緩和するようにしたため、不安等が軽減され、安心して取り組めたと考えられる。

さらに、得意群の好きの度合いが増加した理由としては、「どうすればできるようになるかコツが分かったから」、「授業が楽しかったから」が多かった(図26)。これは、「安定して台上前転をするためにはどうすればよいか」や「着地をピタッと止めるためにどうすればよいか」など課題をもって臨めたからと言える。しかし、苦手群・得意群とも、「先生や友達の言葉掛けがよかったから」を理由にしている児童は少なかったため、より児童の意欲や自信につながるような言葉掛けを研究していく必要がある。

b 体育「好き・嫌い」と「得意・苦手」に着目して

体育を苦手とする児童に焦点を当てて授業を展開した結果、体育を苦手とする児童が検証授業前は7人(表11)であったが、検証授業後は0人(表12)となった。検証授業前、苦手・好き群にいた5人は、検証授業後4人が得意・好き群に、1人が中間層・好き群に移った。また、苦手・中間層群にいた1人は、中間層・好き群に、苦手・嫌い群にいた1人は、中間層・嫌い群にそれぞれ移った。全体的に見て、得意・好き群が21人になり、児童の体育に対する意識が変容したことが分かる。

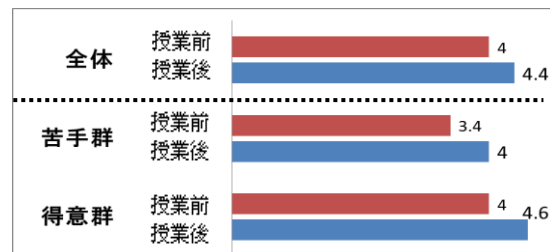


図24 体育に対する好きの度合い(5段階)

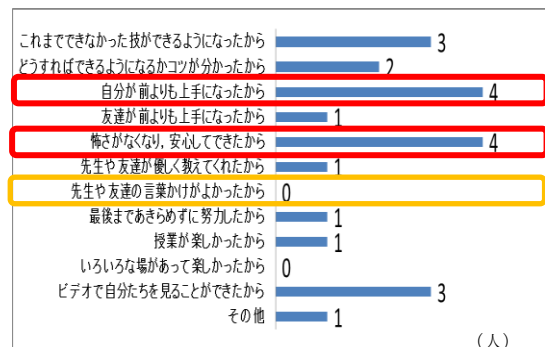


図25 体育好きの度合いが増加した理由(苦手群5人)

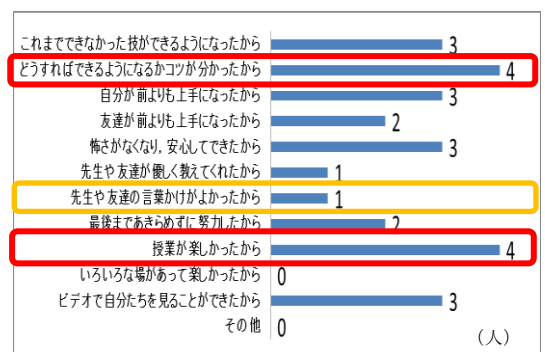


図26 体育好きの度合いが増加した理由(得意群5人)

表11 体育好き・嫌いと得意・苦手の関係(授業前)

授業前	好き	中間層	嫌い	合計
得意	10	4	0	14
中間層	5	3	0	8
苦手	5	1	1	7
合計	20	8	1	29

表12 体育好き・嫌いと得意・苦手の関係(授業後)

授業後	好き	中間層	嫌い	合計
得意	21	1	0	22
中間層	3	3	1	7
苦手	0	0	0	0
合計	24	4	1	29

c 運動有能感の変容

「身体的有能さの認知」、「統制感」、「受容感」からなる運動有能感は、苦手群、得意群ともに増加した（図 27）。得意群が 1.8 ポイント増加したのに対し、苦手群においては、9.2 ポイント増加したため、苦手群に特に有効な授業であったと言える。

「身体的有能さの認知」については、苦手群において、3.2 ポイント増加した（図 28）。これは、台上前転を中心に学習を進め、全員ができるようになったためだと考えられる。また、準備運動時に特別な技術がなくても楽しめる場を設けたり、ねらいに応じて段階的に取り組んだりした成果でもあると言える。

「統制感」については、苦手群において、2.8 ポイント増加した（図 29）。これは、自分や友達ができるようになっていく姿を見て、「努力すればできるようになる」ということを、児童が実感できたからと考えられる。

「受容感」については、苦手群において、3.2 ポイント増加した（図 30）。これは、台上前転の技能習得を目指し、グループ学習での学び合いが効果的であったと考えられる。具体的には、得意群の児童が苦手群の児童の動きを分析し、アドバイスをしたり、試技をしたりする姿が見られた。

d 苦手意識の変容

苦手群においては、劣等感感情と嫌悪感情で、特に大きな変容が見られた。劣等感感情が 5.2 ポイント（図 31）、嫌悪感情が 6.8 ポイント減少した（図 32）。これは、劣等感感情と嫌悪感情に焦点を当て、「苦手意識に基づく指導の要件」を参考に授業を進めたからだと考えられる。失敗への不安を取り除き、それまでの取組を尊重した指導したり、今できる技を取り入れた運動遊びなど行うように意識して指導をしたりした成果であろう。また、回避感情は 2.6 ポイント（図 33）、比較感情は 1.2 ポイント（図 34）

減少した。これは、苦手感情の下位尺度が互いに関連し合っているためだと考えられる。

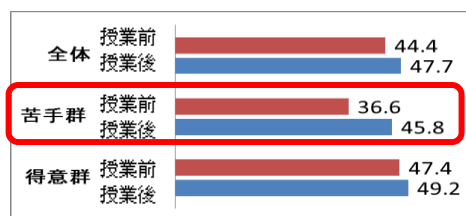


図 27 運動有能感の変容
(身体的有能さの認知, 統制感, 受容感の合計点数)

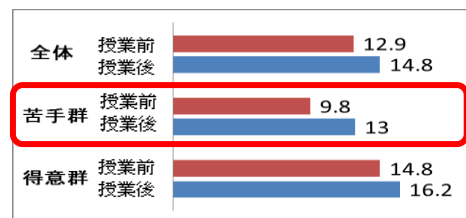


図 28 身体的有能さの認知の変容

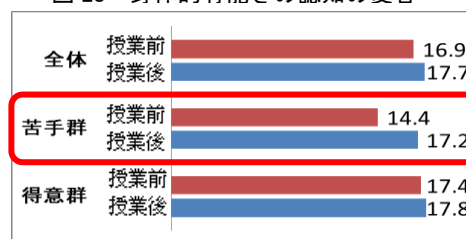


図 29 統制感の変容

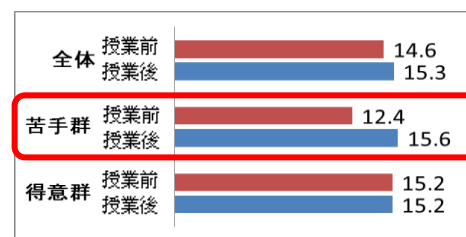


図 30 受容感の変容

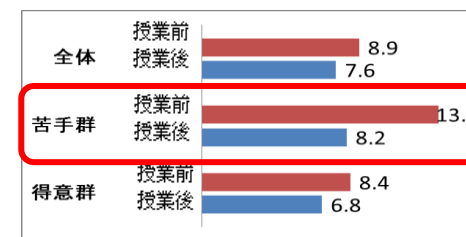


図 31 劣等感感情について

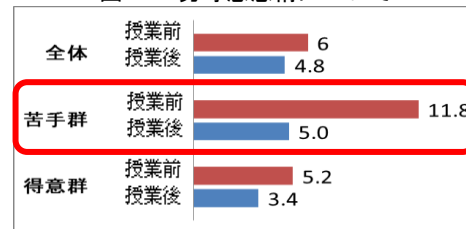


図 32 嫌悪感情について

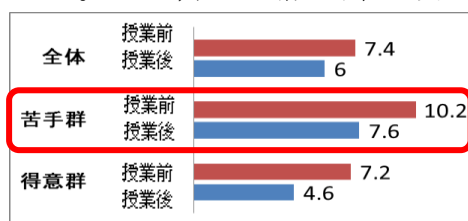


図 33 回避感情の変化

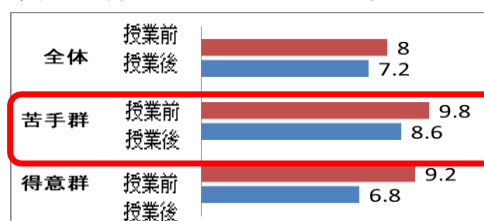


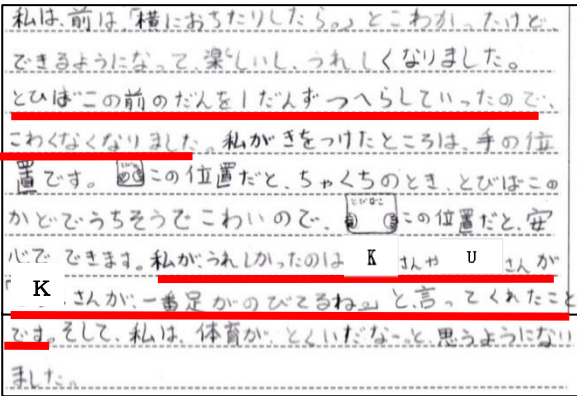
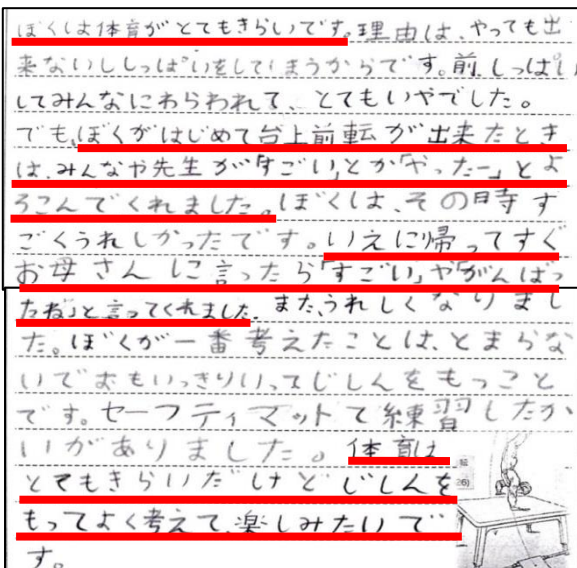
図 34 比較感情について

(イ) 抽出した児童の変容とその考察

抽出児童の体育の「好き・嫌い」、「得意・苦手」、「好きの度合い」、「苦手意識の分析」、「運動有能感」を授業前後で比較し、変容を捉えた。授業後の抽出児童の体育ノート进行参考にしながら特徴のあった4人について考察した。

児童の変容・感想など			
児童 A	項 目	授 業 前	授 業 後
	「好き・嫌い・どちらでもない」 「得意・苦手・どちらでもない」	どちらでもない 苦 手	どちらでもない どちらでもない
	体育に対する好きの度合い	3	3
	苦手意識の分析	合計 50 回避感情 10 比較感情 8 劣等感感情 19 嫌悪感情 13	合計 34 回避感情 12 比較感情 11 劣等感感情 8 嫌悪感情 3
	運動有能感	合計 29 身体的有能さの認知 8 統制感 17 受容感 4	合計 43 身体的有能さの認知 13 統制感 17 受容感 13
	【考察】 【児童の体育ノートより（一部抜粋）】 「体育を好きか嫌いか」、「体育に対する好きの度合い」、授業前後で変化はなかった。 「得意か苦手か」については、「苦手」から「どちらでもない」に変化した。 苦手意識の「劣等感感情」、「嫌悪感情」において大きく低下した。 運動有能感の「受容感」において、他の項目より高まった。 グループの友達と練習をしたことを通して信頼関係が培われたと考えられる。 体育に対する思いの変化までは及ばなかったが、苦手意識の低下し、運動有能感が高まった。 わたしは、体育は好きでもきらいでもありません。できないこともあるからです。 でもたいていじょうせんてんからはじめてできたときうれしかったので、グループの Rさんがじょうずだねというてくれました。うれしかったです。 わたしのこつは、とびはこをもつてくるところからをいれてたいていじょうせんてん		

児童の変容・感想など			
児童 K	項 目	授 業 前	授 業 後
	「好き・嫌い・どちらでもない」 「得意・苦手・どちらでもない」	どちらでもない 苦 手	好 き どちらでもない
	体育に対する好きの度合い	3	5
	苦手意識の分析	合計 42 回避感情 9 比較感情 8 劣等感感情 13 嫌悪感情 12	合計 29 回避感情 7 比較感情 6 劣等感感情 10 嫌悪感情 6
	運動有能感	合計 37 身体的有能さの認知 8 統制感 14 受容感 15	合計 53 身体的有能さの認知 13 統制感 20 受容感 20
	【考察】 【児童の体育ノートより】 「体育を好きか嫌いか」についても、「どちらでもない」から「好き」に変化した。 体育に対する好きの度合いも「3」から「5」に高まった。 苦手意識の「嫌悪感情」において低下した。 運動有能感においては、どの項目も「5～6」ポイント高まった。 体育ノートには、自分の台上前転を客観的に分析してあり、どうすればできるかなど意識したことなどが書かれていた。 より美しくするために足を「ピン」と伸ばしたいなど、意欲的な感想が多く、自分の目標や見通しを明確にもつことが、「分かる」、「できる」につながり、体育好きに変容した。 わたしは体育が好きになりました。これまでできなかった台上前転ができるようになったからです。わたしなのコツはふみきりをいきおいよくして、トンクルとピタリのリズムで回ることです。Mが 台上前転ができるようになったのを見てわたしもできそうだなと思いました。Mもわたしというよ さいはあつしはいいもしてました。わたしもやるといじめでできたときはうれしかったです。また、やりたいです。		

児童の変容・感想など			
児童 S	項 目	授 業 前	授 業 後
	「好き・嫌い・どちらでもない」	好 き	好 き
	「得意・苦手・どちらでもない」	苦 手	得 意
	体育に対する好きの度合い	3	5
	苦手意識の分析	合計 43 回避感情 10 比較感情 12 劣等感感情 12 嫌悪感情 9	合計 42 回避感情 10 比較感情 12 劣等感感情 11 嫌悪感情 9
	運動有能感	合計 38 身体的有能さの認知 10 統制感 13 受容感 15	合計 42 身体的有能さの認知 13 統制感 14 受容感 15
【考察】		【児童の体育ノートより】	
・ 体育が「苦手」から「得意」に変容した。 ・ 体育に対する好きの度合いも「3」から「5」に高まった。 ・ 運動有能感の身体的有能さの認知が高まった。 ・ 体育ノートには、着地の際、跳び箱の角が当たらないように、着手位置を決めるなど、ポイントを自分なりの工夫で具体的に書かれていた。 ・ 自分の成長を感じ取りながら、学習に取り組めた。 ・ グループの友達の言葉も自信につながったようである。			
児童の変容・感想など			
児童 H	項 目	授 業 前	授 業 後
	「好き・嫌い・どちらでもない」	嫌 い	嫌 い
	「得意・苦手・どちらでもない」	苦 手	どちらでもない
	体育に対する好きの度合い	1	1
	苦手意識の分析	合計 43 回避感情 14 比較感情 6 劣等感感情 14 嫌悪感情 9	合計 21 回避感情 7 比較感情 7 劣等感感情 4 嫌悪感情 3
	運動有能感	合計 33 身体的有能さの認知 12 統制感 10 受容感 11	合計 41 身体的有能さの認知 14 統制感 13 受容感 14
【考察】		【児童の体育ノートより】	
・ 「体育を好きか嫌いか」については、「嫌い」のままで変容は見られなかった。 ・ 「得意か不得意か」については、「苦手」から「どちらでもない」へ変容した。 ・ 苦手意識の「劣等感感情」で大きな低下が見られ、苦手意識全体においても授業前の半分以下となった。 ・ 運動有能感については、どの項目においても高まりが見られた。 ・ 体育ノートからは、「台上前転ができるようになりたい」という思いが伝わってきた。 ・ 第4時に初めて台上前転ができた様子をクラス全員で見て、喜び合うことができた。自分の「できた」をみんなが喜んでくれたという経験によって、喜びの気持ちも増加したと考えられる。 ・ 友達や教師、保護者などいろいろな人からの称賛や激励もあり、自信へとつながったようである。			

IV 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 小学生・中学生・高校生・大学生，保護者，教師への意識調査

ア 意識調査より，小学校3・4年時に体育を苦手と思うようになった人が多い。また，同時期までに体育を得意と思うようになった人も多いが，この時期から下降傾向となっていることが分かった。このことから，小学3・4年生における体育が児童へ与える影響が大きいと分かった。【Ⅲ-2-(3)参照】

イ 小学校入学前と小学1・2年生までに，体育を得意と思うようになった人の数が多い。このことから，小学1・2年生では，様々な運動遊びを通して運動の楽しさに十分触れさせることが大切であると分かった。【Ⅲ-2-(3)参照】

ウ 体育を苦手と思うようになった理由で最も多かったのが，「うまくできない」であった。このことから，体育を苦手とする児童に「できそうだ」と見通しをもたせ，友達と協力しながら「できる」ようになっていくことが重要であることが分かった。【Ⅲ-2-(4)参照】

エ 体育を苦手と思うようになった理由で，2番目に多かったのが，「体を動かすことが好きでない」であった。また，得意と思うようになった理由で最も多かったのが，「体を動かすことが好き」という理由であった。このことから，体育授業の導入時に，主運動につながる運動遊びを楽しみながら行うようにしたところ，体育を苦手とする児童も意欲的に取り組むことができた。【Ⅲ-2-(4)参照】

オ 体育を苦手とする人は，「コツが分かる」，「友達同士の励まし合いや教え合い」が大切と考えていることが分かり，授業モデル作成に生かすことができた。【Ⅲ-2-(6)参照】

(2) 苦手意識の分析を生かした学習指導の工夫【Ⅲ-4-(2)-ケ参照】

ア 苦手意識の分析を行い，「苦手意識に基づく指導の要件」を基に段階的な指導をしたため，「自分が前よりも上手になった」，「失敗への不安がなくなり安心してできた」などの理由から，多くの児童が体育好きになった。

イ 苦手意識の分析から，下位尺度の高い児童に焦点を当てて，「苦手意識の分析に基づく指導の要件」を参考に授業を進めたことで，劣等感感情の高い児童は，失敗への不安が取り除かれ，嫌悪感情の高い児童は意欲的に取り組むことができるようになり，苦手意識は低下した。

(3) より体育好きな児童を育てる授業モデル【Ⅲ-3-(1)，Ⅲ-4-(1)-コ，Ⅲ-4-(2)-ケ参照】

検証授業Ⅰ・Ⅱにおいて，「主運動につながる運動遊び」，「『分かる』を促進させる教具」，「グループ学習」などによる成果が見られ，授業モデルの有効性を確認することができた。よって，児童の苦手意識は低下し，運動有能感が高まり，より体育好きになった。

(4) 小中高12年を見通した器械運動領域の系統的な指導計画【Ⅲ-3-(3)】

意識調査等を基に，「小中高12年間を見通した器械運動領域の系統的な指導計画」を作成したことで，各運動の系統性や身に付けさせたい基本的な動きが明確になり，単元指導計画づくり等に役立てることができた。

2 今後の課題

- (1) 器械運動領域以外の領域においても，「苦手意識の分析」や「苦手意識を踏まえた指導の方向性」を生かして検証を進めたい。
- (2) グループ学習における体育を苦手とする児童の気持ちの変容や声掛けの影響について，詳しく見取るための手立てが必要である。

〈 引用文献 〉

- | | | | |
|----|----------|----------------------------------|----------------------------------|
| 1) | 中村敏雄 著 | 『教師のための体育教材論』 | 1989 年 創文企画 |
| 2) | 吉川麻衣 他 | 『「運動嫌い」「体育嫌い」の実態と
発生要因に関する研究』 | 2012 年 仙台大学大学院
スポーツ科学研究科修士論文集 |
| 3) | 上家卓 他 | 『小学生における体育授業への
苦手意識に関する研究』 | 2014 年 北海道教育大学紀要 |
| 4) | 岡澤祥訓 他 | 『運動有能感の構造とその発達
及び性差に関する研究』 | 1996 年 スポーツ教育学研究 |
| 5) | 宇土正彦 他編著 | 『「わかる」と「できる」 学校体育授業辞典』 | 1995 年 大修館書店 |
| 6) | 丸山真司・岩田靖 | 『体育における教具とは 体育科教育』 | 2012 年 大修館書店 |
| 7) | 出原泰明 編著 | 『体育の授業方法論』 | 1991 年 大修館書店 |
| 8) | 山内基広 編著 | 『大好きになる体育の授業』 | 2007 年 日本標準 |

〈 参考文献 〉

- | | | | |
|---|----------------|--|------------------------|
| ○ | 文部科学省 | 『小学校学習指導要領解説－体育編－』 | 2008 年 東洋館出版社 |
| ○ | 文部科学省 | 『中学校学習指導要領解説－保健体育編－』 | 2008 年 東山書房 |
| ○ | 文部科学省 | 『高等学校学習指導要領解説
－保健体育編・体育編－』 | 2011 年 東山書房 |
| ○ | 国立教育政策研究所 | 『評価規準の作成，評価方法等の
工夫改善のための参考資料』 | 2011 年 |
| ○ | 松本真一 編著 | 『これならできる現場体育』 | 2007 年 出版企画
あさんてさーな |
| ○ | 出原泰明 編著 | 『「みんながうまくなること」を教える体育』 | 1991 年 大修館書店 |
| ○ | 大貫耕一
西田佳 編著 | 『体育の本質がわかる授業 中学年の体育』 | 2007 年 日本標準 |
| ○ | 高田典衛 著 | 『体育嫌いをつくりたくない体育授業』 | 1981 年 第一法規 |
| ○ | 山内基広 著 | 『ねこちゃん体操からはじめる
器械運動のトータル学習プラン』 | 2006 年 創文企画 |
| ○ | 大後戸一樹 著 | 『「わかる」「できる」力を
つける体育科授業の創造』 | 2005 年 明治図書 |
| ○ | 高橋健夫 編著 | 『体育授業を観察評価する授業改善のための
オーセンティック・アセスメント』 | 2003 年 明和出版 |
| ○ | 吉澤潤 他編著 | 『とび箱の指導
－わかり・できる授業展開と技術指導』 | 2008 年 小学館 |

長期研修者〔 五代 孝輔 〕

担 当 所 員〔 松本 眞一 〕

【研究の概要】

本研究は、体育を苦手とする児童に焦点を当てて、「より体育好きな児童」を育てる体育学習を目指した研究である。

まず、小学生・中学生・高校生・大学生・保護者・教師への意識調査を基に、体育を苦手と思うようになった原因やきっかけなどを明らかにした。そして、苦手意識の分析を行い、児童の苦手意識がどのような感情からきているのかを詳細に捉えた。次に、意識調査を生かした「より体育好きな児童を育てる授業モデル」を構築するとともに、「苦手意識に基づく指導の方向性」を作成し、検証授業による児童の変容から、有効性を確認した。さらに、「小中高12年間を見通した器械運動領域における系統的な指導計画」を作成した。

研究の結果、器械運動領域（マット運動・跳び箱運動）において、苦手意識は低下し、体育を苦手とする児童はいなくなった。さらに、運動有能感が高まった。

この研究を通して、児童は、より体育好きになり、研究主題に迫ることができた。

【担当所員の所見】

教科体育の究極的な目標は、「楽しく明るい生活を営む態度を育てる」である。また、その大きな課題の一つとして、「苦手意識の解消」がある。小学校期に体育を苦手とする児童は、将来、明るい生活を営むことができるのであろうか。小学校を卒業させるまでに、全ての「苦手意識の解消」を実現させることが、我々、教師の責務でもある。

そこで、本研究は、「体育への苦手意識」及び「運動有能感」を見取る尺度を活用し、体育を苦手とする児童に焦点を当てた。さらに、「学習指導改善の重点を基にした授業モデル」、「苦手意識を踏まえた指導の方向性」、「小中高 12 年間を見通した器械運動の指導計画」等を独自に開発し、全ての苦手意識を低下させ、より体育好きにした。これらの成果は約 2,800 人という膨大な量の意識調査を、地道に分析した一人の長期研修者の教育に掛ける情熱のたまものといえる。

その努力は筆舌に尽くし難い。

今後も本研修同様、教科体育を俯瞰しながら、更に研究の精度を上げ、より体育好きな児童を育ててほしい。